
てふてふ物語

千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てふてふ物語

【Nコード】

N1030V

【作者名】

千

【あらすじ】

自称芸術家の仙女がおくる、可愛い弟子との冒険物語です。愛も運命も何もない！全ては芸術、それだけのために。

1話 村人の噂

おい、聞いたか！

桜ヶ峰の仙人様が弟子をとることにしたらしい。

かの仙人様は三大仙人からも一目おかれる優秀なかたじゃないか。しかもたいそう美しい仙女という！

気難しいことでも有名だが、こんな機会は滅多にない。

もうすでに何百人もの希望者がでているみたいだ。

まさに長蛇の列だったよ。

ん？見てきたのかって？ああ、そうだ。

言っただろ？滅多にない機会だった。

俺もその機会に預かろうと思ったんだ。

しかし、ほら、知っているだろうが、仙人様は希望者に試練を与え、それを乗り越えたものを弟子にするだろ？

どんな試練を与えたんだろうな。

帰ってくるやつら全員が、この世の終わりのような顔して戻ってくる。

俺はもうそれで折れちゃった。

あれはヤバイ。

見ているだけで吐き気が止まらなかった。

桜ヶ峰の仙人様は女王様気質なのかね……。

おい、聞いたか！

桜ヶ峰の仙人様はついに弟子をとることができなかったそうだ。

やっぱり、試練がきつすぎたんだね。

あ、それで、しびれをきらした仙人様が、御自ら弟子を探しに下山するんだと。

いやあ、少し気になって、村の歴史書を紐解いたら、仙人様が下山するのは、極めて稀で、何とここ600年で三回しかないんだよ。な、すごいだろ？

一度お目にかかれないもんかね？ぐふふ・・・。

さて、桜ヶ峰の仙人の伝説はしがない村人の噂から始まる。

これは、長い長い時を生きる仙人のお話。

2話 可愛い弟子を希望します。むさい男はお断りです。(前書き)

仙女視点です

2話 可愛い弟子を希望します。むさい男はお断りです。

何故こうなった。

もとを正せば、三大仙人なんて言われてる変人にさらわれたのが悪かった。

いや、その前に、興味本意で仙術を使っただのがアウトだったのだろ
う。

しかし、まさか、一般人には仙術が使えないとは思わなかったんだ。
適当にひょいと指をふったら、できたからな。

その後、好奇心が疼いて、あれやこれやと試してみたが、どれもこ
れも拍子抜けするほど簡単だった。

とはいっても、私が異常なだけで普通は仙人に弟子入りしても使え
るかどうかは怪しいらしいが……。

まあ、何が言いたいかというと、私は仙人になるつもりはなかった
ということだ。

たいていの者はこぞって仙人になりたがるんだが、何がいいのか甚
だ疑問だ。

酒も煙草も隠れてしか飲めないし、吸えない。世界を平和に導くと
か、何だとか、そういう義務ばかりあって、面倒なことこの上ない。
ふむ、私はその義務をほっぽり投げているから関係ないが。

ひらひらと目の前に桜の花弁が落ちる。

群れて咲き乱れるその様は、悠久と刹那の相反する時を共有しているようだ。

今は冬。季節外れだが、それがまた風流だと思う。

もちろん、自然にこのような景色がつくられるはずがない。仙人が仙人たる所以、仙術が関わっている。

しかし、個人的な要件に仙術を使うのは邪道とされ、本来避けられるべき行為だ。

私の知ったことではないが。

綺麗と可愛いは正義。

全てにおいて優先されるべきことだ。

ああ、癒される。

優しく降り注ぐ日の光もあって、まぶたが重くなってくる。

仙人は睡眠をとらずとも生きていけるが、私はいつも、このうらかな空気に眠気を誘われる。

心おきなく、一眠りしてしまいたいが、残念ながら今日ばかりは昼寝が許されない。

ちらりと数メートル先にある門を見る。

門といっても、鳥居みたいなものだ。満開の桜の中にただずむ姿は莊厳。ただ美しいだけでなく、心を震わせる何かをもつ景色に、知らず満足げに溜め息がでる。

しかし重要なのは門ではなく、その先。

門の向こう側では、私に弟子入りを希望する者達が試練を受けていることだろう。

無事に乗り越えれば、この門のもとまで導かれる手筈になっている。

弟子とは体のいいパシリ、とかの変人仙人は言っていたが、私はそ

うは思わない。

弟子とはすなわち、癒し。

常に私のそばにあり、私を喜ばせる存在でなくてはならないと思う。

うむ、もちろんぬかりはない。厳選に厳選を重ねるつもりだ。

先ほど希望者を覗いてみたが、むさいむさい。

あんなのは断じて認めない。

もう二度と来ないように、本人が最も嫌う過去を延々とリピートさせて

やった。

くくく、すごい顔をしていたな。

愉快愉快。

・・・日が、暮れてきたな。

思考にふけると、時間を忘れてしまう癖をなんとかせねば。

不老不死とも揶揄される仙人という存在は、時間に対して非常にルーズだ。

何せ、時間はたっぷりあるからな。

・・・いや、問題はそこではない。

弟子をとると宣言してから、3日、はたっているみたいだな。
なのに何故、誰もたどりつかない。

少々条件がきつすぎたか？妥協はしたくないが、仕方ない。

条件を減らし、否、いいことを思い付いた。

暇を感じることが多くなってきたことだし、しばし旅にでるのもいいかもしれない。

下山も禁忌のうちのひとつだが、構うまい。

観光もかねて、弟子探しの旅をすることにしよう。

さて、善は急げ、悪も急げ。思い立ったが吉日とも言つし、早速支度をするかな。

ひらり、月光を身にうけた桜が肩にのる。くくっ……ああ、楽しみだ。

3話 弟子入りの悲劇（前書き）

仙女に弟子入り志願の猛者達視点

3話 弟子入りの悲劇

弟子入り志願その1

噂を聞いてここまでやって来た。

目の前にはついに山への入り口がある。

何とはなしに、ここ数時間ずっと見続けてきた山の頂きを今一度見る。

仙人の実力は住む場所に反映される、というのは子供でも知っている常識だ。

もちろん俺も知っているし、流れ者としてやってきた俺は、何度も実際に肌でそれを感じてきた。

しかし、この山は、つくづく別格だと思う。季節外れの桜が頂上付近に咲き乱れていることを除けば、目立ったところのない普通の山だ。

にも関わらず、何とえばいいのか、胸に迫ってくるものがある。初めて見たときは、不覚にも涙を流してしまった。

握り拳に力が入る。

俺は心のそこからこの仙人様につかえたい。

何としてでも試練を乗り越えてやる！

誓いを新たにしている彼は知らない。自分の思いがむさいの一言で粉々に割られるということ。

不憫な彼に合掌。

弟子入り志願その2

俺は情報屋を営んでいる者だ。

まだまだ俺より上手な者はいるが、俺もそこその実力はあると思う。

長く立ち続けているために、凝り固まった体をほぐすため、ぐるりと腕をまわす。

それと同時にさりげなく辺りに目を走らせる。

平民出身の者も、貴族も、獣人もいる。

列は長く連なり、当分俺の番はまわってこなさそうだ。

暇を潰す何かを持つてくるべきだったな、と思うと舌打ちをしたい気分にかられ、小さく、本当に誰にも聞こえないくらい小さく舌を打つ。

すると、多少はストレスも緩和したのか、気持ちも落ち着いた。

ふう、と特に意味もなく息を吐き出すと、情報屋としての性なのか、耳が勝手に周囲の噂を拾ってくる。

もう、何度も耳にしたことばかりで、目立って珍しいものはない。

そもそも、どの話も噂の域をでず、正確な情報かどうかは定かではない。つまり、聞き流すくらいでちょうどいいのだ。

が、これはこれでなかなか面白い。

同じ噂でも話す人によって多少内容が変わる。

耳にしたこととは言え、暇潰しくらいにはなるだろうと、本格的に耳を傾ける。

桜ヶ峰の仙人は仙女だ、気難しい、実力は確かだ、など、吟遊詩人になれそうなほど、言葉豊かに語ってくれたが、まとめればそういうことだ。

やはり、目立ったものはない。

しかし、自慢の聴覚が、ぼそぼそと囁かれる音をかきあてた。

内容は、初めて聞くもの、一言でいえばかの仙人の仙術についてだ。

仙術は、文字にすれば二文字だが、その実底無しの沼のように計り知れない。

一般人が知る基礎的な知識として、仙術は扱う者の魂に影響されるということが知られている。

簡単にいえば、炎を操る仙術があれば、水を操る仙術もあり、まれに医療系のものもある。

一概に仙術とはこれというものがないのだ。

ただ、先に述べた通り、魂に影響されるため、炎と水の両方ということではできない。

本に出てくる忍者のように、印を組さえすれば何でもできるということはないのだ。

あくまで一つ。

それが原則。

つらつらと考えを続けているうち会話も進む。

物質の顕現、それが、ここの仙人の仙術らしい。

真実かどうかはともかくとして、なかなか信憑性のある話だと思う。頂上の桜。季節外れなことから、仙術だとは思っていたが、その内容通りの仙術なら納得がいくし、何より三大仙人が注目するのもわかる。

凄い人のところへ弟子入り志願をしてしまったな。

恐怖からか、武者震いなのか、僅かに体が震えている。

上手くすれば、名誉も栄光もいつ
ぺんに手に入る。

俺は自分の口角が上がっていくのを、他人事のように感じながら、静かに目を閉じた。

彼が、舌打ち感じ悪いと、拒否されるのはもう少し後の話。

弟子入り志願その3

うわああああああ！！！！！！やめ、やめろ。お、俺が悪いんじゃない。あいつが聞き分けがないのが悪いんだ。俺を馬鹿にしやがって！だから、だから・・・。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
！！

ふむ、声が醜い。却下だ。

それに、一度鏡を見て自分の顔を確かめよ。

4話 そうだ仮面をつけよう。(前書き)

仙女視点です

4話 そうだ仮面をつけよう。

はて、どうしたものかな。

かれこれもう一週間。そろそろ旅立ちたいところだが・・・
ふうと、溜め息をつきつつ目の前のものに目をむけると、

腰までの白い髪を後ろで一つにまとめ、紫を基調とした着物に身を包んだ少女がいた。

困ったことに、私は何を着ても様になるからな。
服を決めるのにやたら時間がかかる。

一人の女として、見目には拘りたいところだが、やはり無難に纏めるのが一番だろうか。

すい、と視線を後ろへ向ければ、服の山が出来上がっている。

目を細め真剣に品定めし、そこから、太ももまである黒い布のズボンと、裾に銀の糸で牡丹が刺繍されている藍色のＴシャツを引っ張り出した。

ずささつと山が崩れるが、構っている暇はない。

どれもこれも昔貢がせたものだ。？違うな。ただの献上品だ。

今から数百年ほど前に流行した、仙人信仰の時、服が欲しい、金も欲しいといったら、余るほどくれたんだ。

いい時代だったな、と昔に思いをはせつつ、再び鏡に向き直り、選んだ服を体にあてがってみる。

ふむ、多少地味だが、悪くない。

これにするか。

髪はポニーかツインか。
ふむ、弄らずそのままにしたほうが服にあう……。。
靴はこの革のものでいい。
気に入らだな。

あとは、顔か？

ぺたりと顔を触ってみる。

東洋系の凹凸の少ない顔だが、醜くはないと思う。

美しいとも思えないのが悲しいところだが。

それにしても、いつ見ても迫力にかける面白味のない顔立ちだ。

仙術で顔を変えてみてもいいが、自分が不細工だと認めるようで、
何だか癢にさわる。

……。いつそのこと顔を隠すのはどうだろう。

覆面なら

謎の覆面参上？城の上でワハハやらなければならんな。

もしくは強盗とか。

それはそれで面白いことになりそうだが、色々面倒くさそうだ。

他の候補としては、確か赤鬼の鼻から上が隠れるものがあつたはず
だ。

高名な職人がつくつたらしいが、これも貢ぎ物の1つだ。
苛烈な赤と、滑らかなラインが美しい。

そういえば、今までつけたことなかったな、と思いつつ、顔に装着
する。

くくく。なかなか似合うではないか。

ごく普通の格好に鬼の面が異様に映える。

赤と藍のコントラストもいい。

それに、この独特さが、非常に私らしくていいな。

早いことにもう、日もくれた。

お披露目は明日にまわして今日は休むことにしよう。

俗物な仙女の出立は近い。

5話 うおおっ！？謎の生命体発見。（前書き）

桜ヶ峰 麓の村の女将視点です

5話 うおっ！？謎の生命体発見。

がやがやと、普段なら考えられないほど、うちの宿は賑わっている。言わずもがな、仙人様効果だ。

ここ数日、宿は満員で、あたしらは目が回るほど忙しい。

そして、それに比例して、収入も右肩上がりだ。

終始にたにたしてしまうのは仕方がないと思う。

気持ち悪い、なんて言葉が耳を掠めたが、華麗にスルーしてやった。ニタニタはとまらない

．．．．．だったらよかったのに。

一体何があったのか、仙人様を訪ねに行って帰ってきたものは、全員が全員、茄子のようになっていた。

青を通り越して、顔が紫なんだ。

おまけに、一刻も早くこの場を去りたいのか、夜遅くに帰ってきたものも、宿をとることなく、村を出ていつてしまう。

まあ、お陰で楽チンではあるが、暇で暇でしようがない。

今日も今日とて、カウンターに肘ついて、ぼうっとするはめになった。

唯一の救いは、ここが窓に近いことかね。

吸い込まれるような青い空で、船こいでる白い雲がよく見える。

平和、だねえ。やっぱり暇かな。

つらつらと下らないことを考えていると、ふいに鈴の音が辺りに響いた。

来客の合図だ。

緩みきっていた糸をピンと張らせるため、深く息を吸い込み、前を向く。

そこには、一人の少女が立っていた。

少女といっても体つきから、10台後半であるだろう。

質素な靴、そこからすらりとした足が伸び、太もも辺りからゆったりとした黒い布のズボンが続く。

腰はきゅっとしぼまり、その上にやや大きめの膨らみが見える。

乳白色の細い首をたどって、顔を……。

ああああ、しまった。現実を直視しなくなって、視線が逸れてしまった。

今一度、と視線を向ければ、こちらに向けて歩いてくる姿が目に入った。

その顔には、鬼の面がつけられている。

顔全体を隠すものでなく、あくまでも上半分を隠すものだが、少女の芸術的とも言える姿態にとあわさって、独特な雰囲気をつくりあげている。

独特といっても、不自然な訳でなく、気品さえ感じられる。

死神のような。

まがまがしくはない。
けれど、研ぎ生まされた刃のように、静かで、恐怖を凝縮したようなイメージがする。

「一晩とまらせてもらいたい」
！？あたしが呆けている間に、少女は目の前まできていた。形の良いふつくらとした唇が発するのは、澄んだアルトだ。思わず聞き惚れてしまう。

「聞こえているか？」

！！しまった。あたしとしたことが。
また、呆けてしまっていた。

それをごまかすように営業スマイルを浮かべようとして、見事にひきつった。

「は、はい。一晩ですね。600シンとなります。」
ちっ・・・しかも声も上ずってしまった。

しかし、あたしの心のうちなどどうでもいいというように、少女は一言「そうか。」と呟いて、腰のポーチに手を突っ込んだ。

暫くごそごそ探っていたが、みつかったのか、ぬっと握りこぶしを差し出してきた。

反射的に手を出すと、チャリンつと涼やかな音をたてて硬貨がのせられる。

「ええつと……つてええええええええええええ！おい、お前さ、ごふごふん。すみませんが、桁が1つ違いますよ！多すぎます。」

な、何を考えているんだこの嬢ちゃんは！6000シンなんて、1ヶ月暮らせるだけの額があるじゃないか。どこのお貴族さまだよ！

「そうか。だが、金に困っているわけじゃないからとっておけ。今日は記念すべき日だからな。」

………齡35の今。未知と遭遇しました。

死神は金持ちだったのです。

6話 実は隠れびりです。(前書き)

仙女視点です。

今さらですが、仙女の名前は《てふ》です。
由来は蝶から

6話 実は隠れびりです。

昨夜の女将は愉快的なやつだった、と現実逃避したくなるのも仕方ないと思う。

何せ、

「金だせや、金。嬢ちゃんも怪我なんてしたくないだろ？ ああん？」

只今絶賛かつあげ中だ。いや、するほうでなく。

ここは、あの村から徒歩2時間先の道の上だ。

一本道なので、迷うこともない。

周囲の森に思いを馳せながら歩いていたわけだが……。

目の前に私の嫌いなむさい男が6人。

……蹴散らしてやりたいところだが、正直に言おう。

こわすぎる。ほんとこいつらこええええ！！！！

ああ、もう。

私の長所に自己把握が正確だ、ということをおこつ。

つまり、私は私がどんな性格をしているのか、明確にわかっている。

曰く、ビビり。

そして、見栄っ張りということも付け加えておく。

恥ずかしい。ビビりなんて。

それを知られたくなくて、見栄っ張りにもなったんだが。

ともかく。

平和かつ、穏便にことをすませ「五月蠅い。見苦しいぞ。煩惱小僧。

」

………今のは、誰の口から出た言葉だ？

嫌な確信をもちつつ、ゆっくりと相手の顔を一人一人確める。どう考えても、先ほどのアルトなんて音を出しそうにない顔をしている。そもそも、初めてあったこいつらから、聞き慣れた声が発せられるはずがない。

結論。今のは私だ。

っWhy!?

何を口走っているんだ私！

うああああ。怒気が、殺気が見える。

どうすれば………

そうだ、今からでも遅くない。

金を払えば何とかなる。

急げ！いや待て！相手を刺激しないよう、ゆっくりとだ。

多分一掴みあれば十分だろう。

助かるかもしれない、なんて思ったら、思わず笑ってしまった。

鶏な内心が、やばい、やつらを刺激してないか、とバタバタやっていたが、やつらは顔が青いだけで、特にかわりはない。

？青い？そうか、何か事情があつてかつあげなんてしているのか。
罪悪感を感じているのだな。

心配はいらない。

私は何とも思つてないぞ。

恨むなんて後が怖いこと絶対にしない。

ふう。何はともあれ、金の後に暴力は待つてなさそうだ。
さつさと渡して逃げよう。

「これくらいでいいだろう。受けとれ。」

渡したあと、即逃げるために少し屈んでおこつ。

緊張により、口内にたまつた唾をのみ込む。

手はまだポーチに突っ込んでいるが、硬貨はしっかり握りしめてある。

よし、行ける！

気合いと共に腕をつきだす。

ついでに腕を捻つて、拳を開いたとき手のひらが上に向くようにした。

目は瞑つてある。

恐怖であけていられなかったんだ。

腕が伸びきつたところで、強張っている指を意思の力で決じ開ける。

これが限界。
体が竦み上がって動けない。

ふと、今の状態を想像して、笑いが込み上げた。

「くくつ。滑稽だな。お似合いでもあるか。くくくつ……」

ああ、情けない。

どれくらいそうしていたのか。

何の反応もないことをいぶかしながら、そつと目を開ける。

そこには、

一人の男が倒れふしてるだけで、他には誰もいなかった。

「何だったんだ、いったい。」

7話 鬼の笑い（前書き）

6話のかつあげ君達視点です。

7話 鬼の笑い

うまい話には裏がある。

それが世の中の法則だっていうことを忘れていたんだ。

「金だせや、金。嬢ちゃんも怪我なんてしたくないだろ？ ああん？」

水上都市ウェルネから森迷都市サイズスへの道中、いい鴨を見つけた。

ターゲットは10台後半だろう少女だ。

持ち物は腰についている大きめのポーチと左肩に提げている袋のみで、正直金のほうは期待できない。

しかし、純白の髪、すりりとした姿態、何よりほどよい質量がある胸は存分に楽しめるだろう。

極上の女。

しかも、見た目通りの年ならお手付きでない可能性もある。

形の良い赤い唇が、面に隠れている素顔も美しいと告げている。

俺達にはやけた顔で、さらに距離を縮めていく。

その時だ。澄んだアルトの声が響きわたったのは。

「五月蠅い。見苦しいぞ。煩惱小僧。」

やつはそういうと、臆した様子もなく俺達の顔を一人一人ゆつくりと見回した。

小馬鹿にしたような態度に腹がたつ。ただでさえ、仕事を首にされて苛立っているところだ。

急速に頭に血が上っていった。

こめかみのあたりが、どくどくと激しく脈うつ。

他のやつらも同じ様子だ。

暴力をふるつもりはなかったが、こうなったら思う存分やってやるう。

泣かせて、命乞いさせてやる。

俺はそう決めて、一歩先に進む。手を伸ばせば楽に届く位置だ。どこを殴ろうか？

顔はだめだ。価値が落ちる。

とすれば、腹………、なっ!?

視線を腹のほうに移すと、やつがポーチに手を入れて、何かを探すように動かしているのが見えた。

ずっと注視していたのに全く気づかなかった。

驚愕にはっと、短く息を吸ったら、やつは、唇を歪め嘲笑してきた。

ツーっと背中に冷たいものが落ちる。

俺の汗か、それとも悪寒とでもいふべきものなのか。

頭のどこかで警報がなっている。

血が、上った速さよりも速く下がっていく。

逃げなければ。

第六感とでもいう何かがいきりに囁く。

そうだ、何故疑問に思わなかった。

やつは最初から余裕そうにしていた。大人の男6人に脅されているにも関わらず。

俺達をどうにかする自信が、確信があった、そう考えてしかるべきだった！

動揺。

不安。

焦燥。

シグナル。

恐怖。

すなわち混乱。

俺達が動けずに棒立ちしていると、辺りにまた、やつの声が響きわたる。

「これくらいでいいだろう。受けとれ。」

あれほど魅力的に思えた声が、死神の鎌のように喉元につきつけられる。

やつは流れるような動作で身を屈めると、俺の腹めがけて拳を繰り出した。

腕に捻りを入れ、腰を使って出された一撃は、それ相応の威力をもっていた。

暗転。

遠くなっていく意識の中でやつの、笑い声、と、数人分、の足音が聞こえた。

「くくつ。滑稽だな。お似合いでもあるか。くくくつ……………」

はあ、はあ、はあ。

「おい、逃げ切ったか！」

「ああ、おってくる気配はなさそうだ。」

整わない息をそのままに、俺はその場に膝をついた。
先ほどの情景が目焼き付いている。

一撃で地にふした男。
のばされた腕。

手のひらからこぼれる硬貨。

そして、口元の笑み。

カタカタ、と体が震えだす。

なまじ、あの女の見目が完璧だった分、恐怖が倍增する。

チャリンと鳴った硬貨が、地面に落ちたとき、言葉にされなくても、理解できた。

金が欲しければ、地に侍り、情けない姿をさらせ。

やつはそう語っていた。

ふいに、喉元から何かが込み上げる。

我慢なんてできるわけがない。

四つん這いの体勢のまま、みつともなく、胃のなかのものを吐き出す。

暫くして、吐き気がおさまると、醜悪な臭いが鼻をついた。

もつと、澄んだ空気を肺にいれたくて、未だ震える膝を叱咤して立ち上がる。

ふう、はあ、あぐっ・・・う、はふう、はあはあはあ・・・

何度も、何度も何度も何度も何度も、繰り返し息を吸っては吐く。

脳裏に響く滑稽だな、という言葉と共に。

7話 鬼の笑い（後書き）

何故、仙術を使わなかったのか疑問に思つかも知れませんが、読んでいけば、解消されていくと思います。

もちろん、てふの仙術は、物質顕現なんかじゃないですよ？
楽しみにしてくださいれば、幸いです。

8話 旅は順調！とはいきません。（前書き）

てふ視点です。

犬は歩けば棒にあたる。では蝶が飛んだら？

虫取網にきまっているでしょう。

あ、ただの持論ですよ！

譲るきはないですが。

8話 旅は順調！とはいきません。

かつあげ事件から幾日。

正確な日数はわからないのは、特に数えなかったからだ。
急いでるわけでもなし。

仙人は時間に縛られることがないから、つついルールになっ
てしまっ。

しかも、どういう原理なのか、仙人は寝る必要も食べる必要もない。
もとは普通の人間なのに不思議なもんだ。

ふむ。好奇心が疼くな。

誰か仙人を解体したりしないだろうか。

もちろん、立ち合ったりはしない。

結果だけで十分だ。

解体されるのが私でなければ、誰でもいい。

私から遠く離れた地で実験し、その後すみやかに裁判にかけられて
死刑、結果だけが噂として流れる。

これがベストだな。

人を解体するような危険人物は、私が出会ってしまっ前にいなくな
るといい。

保身第一の思考を続けながら、道なりに進んでいく。

朝昼夜朝昼夜朝昼夜朝昼夜朝昼夜朝昼夜……。

休むことなく、朝昼夜朝昼夜朝昼夜朝昼夜。

で、何故私は森の中にいるんだ？

きちんと舗装された道を歩いてきたのに。

そういえば私は極度の方向音痴だった気がする。

.....。

まあいい。いずれ何かにあたるだろう。

休むことなく、朝昼夜朝昼夜朝昼夜。

で、何故私は洞窟の中にいるんだ？

来た道に戻ってきたはずなのに。

途中で、甘い臭いに誘われて、花畑によったのが悪かったか？
しかし、それに値するだけ美しいところだったからよしとする。
さて、先へ進んでみるか。

そのうち何かにあたるだろう。

休むことなく、暗暗暗暗夜朝昼夜朝昼夜。

「どうしてこうなった.....。」

現状確認。

足、動かない。
腕、動かない。
尻、動かない。

頭、かろうじで左右に動く。

以上。

いやはや。何だ、この理不尽な状況は。
命の危機を感じるぞ。

特に、

目の前の、

二階建ての

一軒家くらいある、

巨大な、

蜘蛛、「きしゃーーーー！！！！！！！！」

「これ、何てフラグ？」

悲鳴もあげず、涙も流さず、顔をひきつらせるだけで済ませたのは、
私にしてはかなり上出来だろう。
レベルアップしたな。

訂正。

「ぎゃあああああああああああああ……！！！！！！」
悲鳴はでた。

どうやら、反応が遅れただけらしい。
あ、涙も出た。

うむ。

悲劇のヒロインとしては上々だな。多分。

8話 旅は順調！とはいきません。（後書き）

蝶には蜘蛛。
このコンビ。

9話 窮地に陥ると秘められた力が開花する。はずがなかったああああー！（前
てふ視点です。

9話 窮地に陥ると秘められた力が開花する。はずがなかったああああー！！

お、おおおおおお応答せよ！

誰でもいい！何でもいい！

と、とにかく現状を踏み倒す何かこいいいいい！

神か！そうか。今こそ助ける！

ヘルプヘルプヘルプヘルプヘルプヘルプ！！

どういうことだ！

これだけ必死に祈っているんだ。

奇跡の1つや2つおこしてみろ、役たたず！

今なら無神論者の私が、改心してもいいと言っているんだぞ！？
嬉しいだろ！？というか喜べ！

あああああああああ、近い近い近い近い近い！！！！！！
さつきからこれだけ叫んでいるのに、声が出ぬ。

恐怖と嫌悪で上手く機能してないんだろ。

パクパクと魚のように口を開閉する様は、さぞかしおかしかろう！
もういつそ食え。

これ以上恥をさらしたく「ぎゃしゃああああー！！！！」

ひい！嘘です嘘です。

認めます。死にたくないです。

こんなのに食われる終わりは嫌だ！

猫ならともかく。

蜘蛛はい・や・だ！断固拒否！！

無数の赤い目。

蠢く口。

毛むくじやら。

何より、蜘蛛は可愛くなああい！！！！

よし、調子がでてきたじゃないか。

困ったときの仙術。

私のこれは直接攻撃は出来ない。

が、こいつを追い払うくらいの効き目はあるだろう。

混乱を振り切った頭で、術を行使する。

闇／無／響く／悲鳴／狂った時計／泣き声／無数の白い手

「連奏。」

刹那。

やつが、闇に喰われた。

成功。だが、ここからが本番だ。

私の術の本質は『虚栄』

つまり、全く、欠片も、安心できない。

今は誤魔化されてくれているみたいだが、それも時間の問題。
何が言いたいかというと、この体にへばりついている糸をひっぺがして、逃げなければならぬのだ。

ぐぐぐつと全身に力をいれる。

残念ながら、仙人といっても、身体能力は人間と変わらない。

しかし、仙人は自分の体に秘められている力を最大限引き出すことができる。

あまり知られていない、仙人の秘技の1つだ。

これやると、筋肉痛が酷いから、あまりやりたくないんだがな・・・

・・・

。

蜘蛛のまわりの闇が晴れる頃には、すでに遠くに逃げていた。

逃げ足と体力には自信がある、とどこかで誰かがそう呟いた、かも
しれない。

9話 窮地に陥ると秘められた力が開花する。はずがなかったああああ！！（後

うーん。何か変。描写が下手だ。

あ、初めて、てふの仙術をだしました。

文中に本質は『虚栄』なんて書きましたが、簡単に言えば、幻です。こっ、触れれば偽物ってわかつちゃうけど、それ以外は、見た目も音もリアル、みたいな。

連奏、っていうのは仙術を発動するためのキーワードです。仙人によって違います。

つまり仙術は、

- 1 イメージ なお、言葉に表してイメージする方が確實
- 2 発動のキーワード イメージ終了ですよの合図。
- 3 動作 上級者はなくてもいい

という感じです。

矛盾を感じたり、あれ？っと思うことがあったらお知らせください。修行します。

10話 水上都市ウェルネ（前書き）

てふ視点です。

10話 水上都市ウエルネ

空を求めてさ迷う手

水面に落ちる教会の鐘

日の光りの調べにのって

小さな木船にたどり着く

ゆづらゆら

ゆらゆらり

白詰草の王城に

羽の透けた妖精が見えるよう

ゆづらゆら

ゆらゆらり

ウエルネ、ウエルネ

水上の都

時の女神が微笑む地

心が洗われるようだ。

目の前には水上都市ウェルネという町が見えている。

白で統一された建物が、詩にある通り空に向かって伸びている。

何より、水上都市の名の通り、大きな湖に浮かぶように町が構成されているのがいい。

あのととき食われなくて本当によかった。

そう結論づけると、ほう、と安堵とも感嘆ともつかぬため息がこぼれた。

美しいものに出会えた喜びで体が震える。

ふむ、やはり、可愛いと綺麗は全てにまさる。憂鬱な気分が吹き飛んだ。

くくくつ……。久しぶりに愉快だな。

まずは観光。弟子探しは二の次としよう。

ああ、楽しみだ。

11話 門番の日記（前書き）

水上都市ウェルネの門番さん視点です。

日替わり交代ですので、一人称がずっとかわります。

11話 門番の日記

○月○日 担当俺

暇。農夫来た。眠い。

○月○日 担当わし

子連れの夫婦が来おった。めんこいのお。

彼らを見ると、死んだ婆さんを思い出す。

わしらが移住してきたときも、こんなふうじゃったなあ。

そのあと、馬車にのった行商人が来た。

荷を確認したが、獣人の子供が十数人乗っているだけで特に変わったものはない。

本当は馬車の中に入って、隅から隅まで調査しなくてはいけないんだが、獣と相乗りする趣味はないからな。覗いただけで終わらせた。

○月○日 担当私

今日は快晴。

清々しくて嬉しいけど、日焼けが気になる。

ウェルネ出身の女は肌の白さが売だ。

あまり意味はないと思うが、日陰に身を移した。

特に誰かが来る様子もなく、いたって平和。

戦国時代の名残か、橋の向こう側は見晴らしがよくなっている。

不審者にすぐ気づけるのいいが、見るべきものもなく、思わずあぐびがでる。

うん。平和だ。

○月○日 担当僕

僕は今日が初めてのお勤めです。

緊張します。

目の前には、天国への橋とも言われる、水面を走るように長くのびた橋がのびています。

いつみても美しいです。

先輩方が言った通り、誰かが来ることもなく、手持ちぶさたになつたので、予め持ってきておいた教科書を開きます。

勤勉な訳ではありません。

明日テストなんです。

しかも僕の苦手な世界史なんです。今のうちに頑張らなきゃ。

――以下教科書本文――

今より数百年前、世界で初めての統一戦争がおこりました。我こそはと名乗りをあげる強者達が、剣や槍を血に染めたのです。そんな血で血を争う戦争を止めてくだつたのが、三大仙人様です。かの仙人様方は他の仙人を説得し、平和な未来のため東奔西走しました。

（中略）

そうして邪悪な獣人を倒し、世界は1つに統一された。しかし残念なことに――

あ、どうやら時間のようですね。
帰ることにします。

○月○日 担当俺
うかぁあ……。

今日も今日とていい天気だ。

昼寝日和だぜ。

寝たい、猛烈に。

だが、おつとめが先ですかね。

橋の向こうに黒く人影が見える。

都市とは名ばかりのこの地に、来客は少ない。

来るのは奴隷商人か、わけありの輩のみ、となかなか物騒だ。

この間来た夫婦なんて、食人鬼だったし、農夫は確か有名な指名手配犯だった……。

何にせよ、気を引き締めるのにこしたことはない。

だんだんと近づく点を目を細めて凝視する。

恐らく10台後半の少女。

みずみずしい果実を思わせる姿態に、月光を集めたかのような長い髪。

貴族と言われても違和感を感じない。

しかし、優雅だが、隙なく歩くその様は歴戦の戦士を連想させた。

異様。

とんでもねえやつが来やがった。そんな思いが渦巻く。
もうそいつは目の前だ。

顔の仮面と弧を描く唇が俺に向けられる。

「おまえが門番か。」

涼やかな美しい声だ。

まるで、研ぎ澄まされた宝剣のような……。

1つ息を吸い、マニュアル通りの言葉を紡ぐ。

「そうだ。目的は？」

「ただの観光だ。一晚とまったらすぐに出るつもりだったが、何やら面白そうだからな。暫く厄介になるつもりだ。」

面に隠されてはいたが、俺はやつの目が細められたのを敏感に感じた。

まだ中に入ったわけでないのに、この都市の現状を見抜かれたことに驚愕する。それを面白いと称したことに。

この世は確かに1つに統一された。

しかし、その実態は統一前と変わらない。

国と呼ばれたものが都市と名を変えたに過ぎない。

ウエルネは隣の森迷都市との喧嘩せんそうに敗れ、廃れてしまったのだ。

そもそも勝つみこみはほとんどなかった。

見た目だけにこだわったこの都市は、経済力、軍事力が共に乏しく、他の都市との関係も希薄だ。

水の上に浮かんでいるといえは聞こえはいいが、農業も出来ないし、漁業も、無能な領主の水に毒薬を流せ、の命令で魚一匹いない。

本当に見た目だけの都市だ。

まあ、そのおかげで、占領されずにすんだんだが。

しかし、こいつどこまで気づいたのか。
探ってみるか？

いや、触らぬ神に祟りなし、だな。

普通で行こう、普通で。

「通行証は？」

「ない。」

おいおい、まじか。

普通にやつても駄目じゃねえか。

わかるだろ？ 追い出さなくてはいけなくなっちまうんだ。

そんなの御免だね。

さっきから雰囲気を通さなかったら殺すと言ってるよ。

心が決まればやることは1つ

「どつぞ」

俺は我が身が可愛い

12話 私は芸術家だ。（前書き）

てふ視点です。

それより奥さん。見ました？

なんとお気に入り登録してくださった天使が三人もいるのよ。
嬉しくて憤死しそう。

これからも頑張ります。

12話 私は芸術家だ。

期待はずれ。

その一言つくる。

美しい外見に反して、中はゴミ箱のようだった。

汚い、醜悪、臭いの三拍子。

私の嫌いなものを全て並べたかのような様相だ。

一秒たりともいたくないのが本音だが……
もしかしたら、こんなところだからこそ、原石が隠れているかもしれない。

私は美しいものが好きだ。

しかし、良い素材をさらに磨き、加工するのはもっと好きだ。

一通りめぐってみれば、原石ーもとい弟子候補がいるかもしれん。
それを逃すのは惜しい。

「ふむ。とすれば行動あるのみだな。」

汚い中を歩くのは嫌だ。

だから、見た目だけでも綺麗にしてやろう。

この都市のように。

清浄／正常／進む先／香る花／広がる波紋／旅立ちの時

「連奏。」

仙術を行使する。

辺りに変化はないが、別に失敗したわけではない。

現に、悪臭は消え、甘い薔薇の匂いが鼻をつく。

そして、イメージの通り、足を一歩進めると、私のまわりだけ、ゴミがなくなる。

成功だ。

とはいえ、何も本当に消えたわけではない。

ただ見えなくなったただけだ。

嫌悪感はいぶ緩和されるがな。

私は、ご機嫌とまではいかないが、少し浮上した気分で歩き出す。
大通り、城の周辺、裏通り。

ちらほらと人を見かけたが、私の好みではなかった。

どいつもこいつも枯れ木のように気持ち悪い。

それにしても、私も大概冷淡なやつだ。

あんなに痩せ細った住民に気持ち悪いとは。

ああ、でも可哀想だなんて欠片も思えない。

何でだろうな？

暫くそうした思考を繰り返しながら物色していたが、流石に飽きてきた。

波乱万丈なんてものは遠慮したいが、退屈もごめんこうむる。

通行証を持たない私を快く通してくれた門番には悪いが、うむ、もう出ることにしよう。

無駄骨だったな、と落胆のため息をついて、踵をかえした。

どこをどう通ってきたのなんていちいち覚えていないが、やはり

来た道を戻るのが定石だと思う。

右右左。左左右。狭い道をゆっくりと歩く。

辺りは赤く染まっている。

夕日が白い壁に反射しているのだろう。

血管の中をさ迷っているみたいで、少々恐ろしい。

普段ひた隠しにしているビビりな私が顔をだしそうだ。

左右・・・・・・・・

いくつめかわからない角を曲がる。

相も変わらず狭い路地。

今までと何ら変わらない。

しかし、そこには、

赤く染まったこの場よりも赤い、
一人の

少年がいた。

薔薇の匂いよりもなお強い、血の香りを漂わせて。

少年は、膝の間に顔を埋めるように座っている。

私は血濡れの少年を恐ろしい、危険だ、とは思わなかった。
あまりにも浮世離れた美しい光景に心奪われていたから・・・・・・・・

•
•
○

逢魔が時とも言われるこの時間。
赤い空間に、赤い少年。

1つの絵のように、動かない、その光景に

笑いがとまらなくなった。

「くくっ……くはははは！ あはははははははははは！！！」

!

笑う。

笑う。

笑う。

少年が驚いたように顔をあげた。

その顔を見て、また、笑う。

幼いが、まるで人形のように整った顔立ち。

嬉しくて、嬉しくて、笑いがとまらない。

私はビビりだ。

それは変えようのない事実。

けれども、

私はビビリである前に、芸術家なんだ。

美しいものの綺麗なものの可愛いものの、そういうものを愛し、求め、時

には自らの手で作り出す、芸術家。
それが私の本質なんだ。

ずっと、私がビビリで見栄っ張りだから、こんなはりぼての仙術に
なったのだと思っていた。
でも、違う。

そうではなかった。

根っからの芸術家だから、こうなった。

攻撃力もなく、怪我が治せるわけでもないのは、当たり前だ。
芸術にそんなものは必要ない。

必要なのは、好きなときに好きなものを作り出せる力。
簡単に仙術が使えたのも、そのためだろう。

ウエルネの住民を不快にしか思えなかったのも、彼らが醜いとしか
感じられなかったから。
芸術的でなかったから。

今、私は正しく理解した。
頭のとっぺんから足の先まで、間違いなく私は芸術家だと。

愉快。

非常に愉快だ。

かつてない高いテンションで

私は啞然としている少年のもとへ歩み寄り、視線をあわせるため、方膝をつく。

少年の瞳は、高貴とされる紫。

美しい。

そして、それが全て。

「少年。私はお前が気に入った。」

目が見開かれる。

色素の薄い唇が、戦くように震えた。

私は壊れ物を扱うようにそっと、その頬に触れる。

乾いた血がパリパリと音をたてて落ちたが、それに構わず、優しく撫でた。

「どうだ。私と共に来ないか？」

異論は認めないが、と心の中で続ける。

薄汚れてはいるが、これは、磨けば光る原石だ。

逃がさない。

再びこみ上げてきた笑いを喉の奥で噛み殺す。

少年から返答はない。

が、折角だ、良いようにとらせてもらっ

「沈黙は肯定か？」

紫の底で何かが揺れるれていた。

閉ざされていた口が、ついに開く。

「俺は、人殺しだよ。お姉さんを殺すかもしれない。」

ボーイソプラノ。まさに天使の声だ。

余韻にひたっていたところだが、あとの楽しみとしよう。

「それがどうした。私は小さいことにはこだわらない性質だ。^た重要なのはおまえの意思だけだ。」

無理矢理連れ去ることも考えたが、それでは逃げられるかもしれない。
い。

何より嫌われたら元も子もない。

まあ、断られても、長期戦になるだけだがな。

少年は何かを堪えるようにふく。

拒否ともとれるその行動に、諦めないと決めていても、心が重くなる。

しかし、次の少年の掠れた声が、私を天に連れていった。

「お姉さんは変な人だね。でも、俺はお姉さんと一緒にいきたい。」

13話 綺麗な人（前書き）

血濡れの少年視点です。

13話 綺麗な人

俺は汚いものが嫌いだ。

何故だかはわからないが、汚いものを見ると、胸がむかむかして、どうしようもなくなる。

俺が持つ一番古い記憶は、母の笑った顔。

嬉しくて、嬉しくて仕方がないって、言つて、ニコニコしていた。でも、俺はその笑顔を見て、心底気持ち悪いと思ったんだ。言葉の通り、本当に嬉しそうなのに、目が飢えた獣のようにぎらついていたら。

よくわかっていないまま、汚いな、とそれだけを感じた。

そうしたら頭の中が不快感でいっぱいになって、気づいたら、まわりが赤で染められていた。

でも、不快感は払拭されていて、逆に清々しい気分になったのを、今でも生々しく思い出すことができる。

その後、騒ぎを聞きつけてやって来た兵隊のお兄さんが、あの日母が、高利貸しから莫大なお金を借りた、ってことを教えてくれた。俺にはどうでもいいことだった。

その日から暫くは、特に変わりはないかったと思う。

ただ、俺には父も母もないことになってしまったので、近所のパン屋で働くことになった。

それなりに楽しい毎日だった。

1つ不満があったとすれば、先輩達の暴力だろう。

殴られたり、蹴られたり。

人殺しのくせに、いきがっているんじゃない。そう言われた。

怒りとか、そういうのは感じなかったけれど、俺はまた、汚いな、とぼんやり思った。

それから多分、半年くらい。

俺はそこで働いていた。

だいたい仕事の内容も覚えて、店長にも、そろそろ厨房に立たせてやってもいいと、頭を撫でられた。

嬉しかった。

認められたんだな、と思ったら、薄汚れた自分が誇らしく思えた。だけど、先輩達は気に入らなかったみたいで、暴力はもつと酷くなつた。

汚いな、と思った。

どうすれば綺麗になるんだろう、とも。

俺は汚いのが嫌だから、一生懸命、掃除の方法を考えた。

いろいろ、いろいろ考えて、

殺してしまえばいいんだ、そう結論づけた。

母の時、それで清々しい気分になったから、今回もきつとうまくいく。

殺人が悪いことだとは思わなかった。

それからは、もう記憶があやふやだ。

成功したことと、パン屋をやめなければならなかったのは、確かだけれど。

ああ、兵隊さんに捕まって、牢屋にいれられたんだ。

その時、初めて人殺しが悪いことだとしったんだ。

牢屋の中ではたいてい寝ていた。やることもなかったし。でも、外よりも清潔で、ほっとした。

たまに様子を見に来る兵隊さんに、もう二度と外に出られない、終身刑だ、って言われたから

「良かった」

って答えた。

すごく驚かれたけど、変なこと言っただけかな？

長い、長い間そこにいたと思う。

その頃には、俺にとって、牢屋は牢屋でなくなっていた。居心地が
いいもの。

静かだし、落ち着ける。

ある時、バンバンと大きな音がするようになった。

ご飯を届けてくれる兵隊さんもこなくなつて、お腹が減つて、死ぬ
のかな、と思つた。

でも、結局、俺が死ぬことはなかった。

見慣れない鎧をきた兵隊さんが、牢屋からだしてくれたんだ。

ウェルネは負けたって言っただけ、俺には関係ないことだね。

久しぶりに外に出たら、夜だった。

暗闇に慣れた俺には、月の光が眩しくて、目に涙が滲んだ。

その兵隊さんは、俺の涙を見て、可哀想につて呟くと、ぐしゃぐし
やと頭を撫でた。

俺が面倒を見てやる、とも言っていた。

嬉しかった。

誰かの気配を感じる。

てふさんだろう。

俺を起こさないように気をつかっているのか、そろりそろりと歩いているのを感じる。

だんだんとこっちに近づいてくるけれど、不安はない。

会ったばかりだけど、この人のそばはとても心地良く、真綿にくるまれるような気持ちになる。

襲撃者かと思ったけど、そうでないとわかり、安心する。

ちょっと前まで、いつ死んでもいいと、考えていたけど、今はそうじゃない。

もっと、てふさんと一緒にいたい。だからもう、簡単には死ねない。

咄嗟に開けてしまった目を再び瞑ると、あの衝撃的な夕暮れの邂逅が思い出された。

俺は、悪いことだと知りながらも、その日また、人を殺した。

理由はやっぱり、汚かったから。

俺に覆い被さってきたところを刺し殺したから、全身が血だらけになってしまったのが誤算だった。

汚い人間の汚い血を被ってしまったことに嫌な気分になって、裏路地にしゃがみこんでじっとしていた。

膝の間から覗く地面をぼんやり見つめる。

誰かの足音がこっちに向かってきていたけど、気にしない。
いざとなればまた、掃除すればいいと思って。

とん、とん、とん、とん……

等間隔に響いていた足音が途絶える。
見つかった。

一瞬、悲鳴をあげられるかな？という思いがよぎった。

悲鳴は嫌い。汚いと感じるから。

でも、俺の思惑はずれた。

その人は、はつと息をのみ、次の瞬間

笑った。

母の時とは違う、朗らかな、聞いているこっちが楽しくなるような
笑い声。

びつくりして顔をあげると、この世の者とは思えないほど綺麗な女
の人が立っていた。

鬼の仮面もそれを助長する。

その人は、ひとしきり笑い終えると、俺に歩み寄り、俺の目の前に
方膝をついた。

仮面にあいた穴から、藍色の瞳が覗く。

綺麗。

宝石みたいにキラキラしたそれは、とても、綺麗だった。もうこの時点で魅いられていた。けれど、俺はさらに、この人に魅いられることになる。

「少年。私はお前が気に入った。」

澄んだアルト。

声も綺麗だ、と驚く。

こんなに綺麗な人を俺は他に知らない。

俺は時がとまったかのように動けなかった。

そして、そんな俺に、白い指が静かによって、頬を撫でた。

「どうだ。共に来ないか？」

その言葉に体が歓喜で震える。

はい、と答えを返したい。でも体は微動だにせず、焦燥にかられる。俺のそんな気持ち伝わったのか、

「沈黙は肯定か？」

と尋ねられる。

はい、そうです。しゃべれないぶん、目に気持ちをこめる。

「くくくつ……返事は？」

意地悪な声。

俺の状态がわかっていて言ってるに違いない。

一言言い返してやりたいけど、なんて言えばいいのかわからない。

かつてないくらい頭を回転させる。

「俺は人殺しだよ。お姉さんを殺すかもしれない。」

思考が終わる前にそんな言葉が口をついてでた。

言い終わって後悔する。

嫌われたくない。

嫌われたくない。

嫌われたくない。

でも、これで嫌われる。

諦めにも似た感情が心を埋め尽くす。

しかし、次に響いたのは、侮蔑の言葉ではなかった。

「そんなことどうでもいい。私は小さいことにはこだわらない性質^{たち}だ。重要なのはおまえの意思だけだ。」

傲慢ともとれる自信に満ちた言葉。

嬉しくて、涙が溢れてくる。

それを見られたくなくて、慌ててふいた。

俺の意思？

そんなのとつくに決まっている。

「お姉さんは変な人だね。でも、俺はお姉さんと一緒にいきたい。」

俺が言い終わるや否や、辺りに笑い声が響き渡った。

14話 名前をあげる。(前書き)

てふ視点です。

お気に入り登録してくれた人が増えました。
嬉しい！

14話 名前をあげる。

あのと、私は少年をお持ち帰りした。

軽い体を抱き締めて、近くの家不法侵入して。

勘違いするな。

不法侵入といっても、誰も住んでいない家にだ。

誰も住んでいない〓誰のものでもない〓私のもの

そうだろう？

宿代も浮くし、不法侵入もなかなかいい案だ。

それに、私の目的は風呂だ。

血濡れの姿で、これほど美しいんだ。

洗い清めれば、より一層光り輝くだろう。

久しぶりに腕が鳴る。

本当は、血に触れることは恐ろしく、内心がくぐくぐだが、そこは芸術家魂。

磨けばわかると知って磨かないのは、阿呆のすることだ。

そんなの、彫刻を作りたいのに、彫刻刀を怖がっているに同じ。

私は戦々恐々としながらも、やりきった。

体を洗われて赤くなつた少年の姿も見れたし、結果は上々だ。

しかも、思った通り、痩せぎみではあるが、少年は美しかった。

赤だと思っていた髪は、上品な金色で、柔くふわふわしており、紫の瞳もあいまって、本当に天使みたいだ。

可愛い。かなり愛らしい。

これ以上裸を見せまいと、体に巻き付けたタオルが、シルクの布に

見えてくる。
羞恥で染まった頬も、こちらの機嫌を伺うような上目使いも、
文句なく完璧。

さて、残るは洋服だ。

金は有り余っているから、良いものを買ってやりたいが……
はたして、この町に売っているのだろうか。
脳裏に、寂れた町の様子がよぎる。

「なあ、少年。服を買いたいんだが、どこか良いところは知っているか？」

考えるよりも聞いたほうが早い。

少年の目を除きこむようにして聞いた、ら、

もの凄く嬉しそうな顔をされた。
可愛すぎる。

満面の笑みだ。

そうか、そんなに新しい服が欲しいんだな？

心配無用。

仙人（芸術家）の名に懸けて、一番少年に似合うものを探してやる。
決意新たにした私の耳に、少年の声が響く。

「俺、タダで服が手にはいるところを知っています！」

では、いざ行かん。

「ここか。」

「はい。」

案内されて来たところは、町の中央にある城の一室だった。壁の端から端まで洋服でいっぱいだ。

何でも少年の話では、ここは領主の子供の衣装部屋で、子煩悩な領主が平民の着る質素なものから、貴族の服まで、幅広く揃えた結果がこれらしい。

勝手に持っていったもいいのかと思い、尋ねたら、

領主一家は、この城を放棄して、逃亡した、ということだ。

ふむ。だとしたら、遠慮入らんな。

ありがたく頂戴しよう。

それから約3時間。

自分でも脅威的だと思うスピードで全てを見つくし、3ペアほど候補をつくった。

少年の好みにあうものを選んでもらおうと、きょろきょろと少年の姿を探す。

が、ずらりと並ぶ服が邪魔で見つからない。

もしかして、あまりの剣幕に呆れ果てて、どこかへ行ってしまったのだろうか。

そんな考えがよぎる。

しかし、どうやらそれは杞憂だったらしい。

パタパタとこちらへ駆けてくる音が聞こえた。

続いてごそごそと衣擦れの音がし、服の間から少年の顔がひょっこりでてきた。

どうやら、かかっている服の合間をぬってきたようだ。

少年はその愛らしい顔を私に向けると、にこりと笑って話しかけてきた。

「お姉さん。服は決まりましたか？」

「候補はつくった。」

私がそういうと、少年はもじもじし、手に持っているものを私にさしだした。

「あ、の。これ、お姉さんに似合うと思って……。」

恥ずかしそうに、視線がそらされる。

なんだこのかわいいせいぶつ。

「選んでくれたのか？ありがとうございます。」

内心身悶えしながらも、表面上は平静をとりつくろって、服を受けとる。

それは、淡い水色のワンピースだった。

装飾は腰のリボンのみで、清楚なつくりになっている。

私は早速着替えるために服に手をかけたが、ここに来た本来の目的を思い出して、少年に言った。

「少年。私もこれに着替えるから、この中から好みにあうものを選んで、着替えろ。」

指を指して方向を示すと、私は少年に背を向けて服を脱ぎにかかる。多分少年は喜んでくれるだろう。

私はその喜んだ顔を見て、正気でいられる自信がなかった。

沈黙。

だが、きまらずくはない。

どうやら私のほうが先に着替え終わったようだ。しばらくたつと、少年から

「着替え終わりました。」
と、声がかかった。

「こちらもだ」

少々素っ気ないか、と思いつつ、そう返す。

「あ、ではいつせいのーせ」

何とも可愛らしい掛け声だ。

早く服を着た少年をみたいとはやる気持ちを抑えて、ゆっくり振り返る。

グッジョブ私！

ああ、本当にいい仕事した。

そこには、瞳より、やや濃い色の紫の着物に袖を通した少年がいた。着物といっても、数年前から若者の間で流行している、現代風のものだ。

「よく似合う。」

素直にその言葉が口をついてでた。

「お姉さんも、すごく綺麗です。」

いや私より、少年のほうが……………。

……………。

「少年。今さらだが、名は何という？」

私としたことが、失念していた。

服より、風呂より、まず名前だろう！

少年は私の言葉に目を丸くすると、困ったような顔をして言った。

「ごめんなさい。俺、もう長い間名前を呼ばれていないから、自分の名前が……」

！？これは好都合、げほっ……………。

いや、かわいそうに。

でもまあ、そうとわかればすることは、

「では、私が名付けても？」

否、と返される前に、言葉を繋げる。

「紫音^{しおん}。それでどうだ？」

嫌がられたら、どうしよう。

しかし、少年は喜んで私の言葉に感極まったかのように、頬を紅潮させ、

こくこくとうなづく。

「紫音。俺の名前。」

心底嬉しそうな笑顔を見せる少年――紫音に、私も頬がゆるんだ。

紫音はその笑顔のままで、私を見上げると、恐る恐る聞いてきた。

「お、姉さんは？お姉さんの名前は？」

その質問に私はさらに頬をゆるませ、囁くように呟く。

「てふ。私の名はてふだ。」

15話 弱点（前書き）

てふ視点です。

15話 弱点。

1つ、忘れていたことがある。
弟子というものについてだ。

もう何百年前なのか忘れたが、私が変人に連れ去られたとき、私は
変人と師弟の契約を結んだんだ。

ああああああ。

嫌な記憶だ。

変人の弟子なんて……。

おそらく、脳が拒否反応をおこして、勝手に記憶を封じ込めたんだ
ろう。

ある意味いい仕事してるな、我が脳よ。

と、話がそれたな。

そう、弟子のことなんだが、契約というものを結ばなくてはならな
い。

契約とは、簡単にいえば体を仙人へと変質させるための儀式だな。
ただ、変質といっても、いろいろある。

契約する仙人によって違うのだ、弱点と特性が。

前に仙人は不老不死と説明したが、実際には違う。

不老ではあるが不死ではないのだ。

仙人によって違う、弱点をつけば、仙人を殺すことは可能だ。

例えば、

ある仙人の弱点は《時間》だった。

そいつは、心臓を切り刻んでも、首をはねても、火炙りにして灰にしても再生する。

その代わり、100年ほどすると寿命が来て死んだ。

また、別の仙人の弱点は《太陽》。

日に長くあたりすぎると死ぬ。

他にも、《血》《高所》《呼吸》など

変わり種としては《きゅうり》なんてものもあった。

そして特性。

これは肉体ではなく、精神に作用する。

一部例外を除き、たいていの仙人は長い時を生きる。

しかし、常識的に考えて、永遠の時など、狂気の塊ではないか。

それにも関わらず、仙人が狂わないでいられるのは、ひとえに特性のおかげだ。

特性とは、うまい言葉が見つからないが、心の拠り所みたいなものだ。

先ほどの《太陽》は、血を飲むことで、心を安らげることができる。

《高所》は、低位置での昼寝だったか。

そして、これら弱点と特性は弟子に受け継がれていく。
伝言ゲームのように徐々にその内容を変えながら。

このことをふまえた上で、私は異端だと言っておこう。
私は契約をする前から、弱点も特性もあった。
仙術もだ。

誰の手も加わっていない仙人。
それが、私が仙人から注目される理由だ。

長くなったが、言いたいことは、
紫音がそれを受け入れてくれるかということだ。
蛙の子は蛙。
異端の弟子は異端になるかもしれないという懸念もある。

胸が締め付けられるようだ。
鼓動がはやくなっていく。
心を落ち着けるように目を閉じる。

大丈夫。大丈夫だ。

閉じた目を開き、また閉じる。
肩のあたりを風が通っていく。

いや、風じゃない。

これは・・・・・・・・・・・・・・・・

「てふさん。どうしたんですか？具合が悪そうです。」

紫音だ。

私は紫音に抱きしめられている。

私は、紫音に心配されている。

可愛すぎるな。本当に。

ぎゅっと力をこめて、抱き締めかえす。

「紫音。お前は私と共にいきたいと言ったな。」

右手で紫音の金の髪を撫でる。

「では、聞こう。」

お前は、人でなくなることになっても、私についてきてくれるか?」

答えは、

—————Yes。

長く寂しい時を一緒にすごそう。

16話 俺、鼻血をふくかもしれない……………。(前書き)

紫音少年視点です。

16話 俺、鼻血をふくかもしれない……………。

硬直。

俺の現状を表す言葉だ。

俺は今、綺麗な鬼の面のお姉さんに抱き上げられている。

久しぶりに感じる気持ち悪くない人肌に、体中の力が抜けるような、逆に緊張で強張るような、不思議な感覚に陥る。

しかも、これは俗にいうお姫様抱っこというものではないだろうか。
……………恥ずかしい。

心の中で、俺、男、と呟いてみる。

体はコチコチだ。

しかし、俺の羞恥地獄はまだはじまったばかりだった。

膠着状態の俺に気づいているのかいないのか、お姉さんはうつすらと笑みを浮かべながら歩いていく。

そして、若干小さめの家の前で立ち止まると、半壊して役目を果たしていない扉を蹴りあげた。

ズドンという音がして、扉は家の中にふっとぶ。

俺を抱きながらの蹴りだが、洗練されていて、かっこいい。
お姉さんは武道家の人なんだろうか。

俺がお姉さんの正体を考えている間にも、ことは進む。

お姉さんは、迷うことなく、その家に不法侵入し、何かを探すように、あたりを見回した。

しばらくして、視点が一ヶ所に定まると、小走りにそこへ向かって歩みだす。

そこは風呂場だった。

家のサイズから考えると随分大きい。

お姉さんは、一度何かを確かめるように頷くと、器用にも、俺を下におろすことなく服を脱いだ。

鬼の面も外される。

俺はその美しさに魅とれ、同時に、体に押し付けられる柔らかいものに、頭を混乱させる。

エラーエラーエラー。

俺の脳は状況の判断を諦めたようだ。

が、お姉さんは待つてなんかくれない。

慣れたような手つきで、俺の服を脱がし、そのまま、シャワーに突っ込んだ。

!!!!!!!!!!!!

いきなりの（冷たい水による）攻撃に身をすくませる。
お姉さんとかつついている部分が妙に熱く感じる。

そこからは

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?

???????

!!!!!!!!!!!!!!!!!!?!?

・・・・・・抵抗空しく、全身を清められた。

それだけではない！

見ないようにしてもチラチラと視界に入ってくる、神々しくさえ感じるそれに、

恥ずかしい！恥ずかしい恥ずかしい！！

ようやく解放された俺は、手渡されたバスタオルにくるまる。

そこまでしなくてもいいのに、と睨み付けるが、満足そうに笑われるだけだった。

その笑顔がまた、女神様のように美しくて、俺は結局文句を言うことができない。

どれくらいだったのか、

ばこばこと激しく脈うつっていた鼓動も落ち着き、俺の羞恥心もだいぶ薄れたころ、

何かを考えていたお姉さんから声がかかった。

「なあ、少年。服を買いだいたいだが、どこか良いところは知っているか？」

その言葉に、落ち着いたはずの鼓動が大きくはねる。
服が手にはいる場所、俺は知っている。

お姉さんの役にたてると思うと、嬉しくて、満面の笑みになってしまった。

俺は自信をもって答える。

「俺、タダで服が手にはいるところを知っています！」

「ここか。」

「はい。」

そこは偶然見つけた、城の中のある一室だ。
何千着とありそうな服がズラリと並んでいる。

喜んでくれただろうかと思って、お姉さんの顔を見上げたが、お姉さんはどこか浮かない顔をしている。

気に入らなかつたんだろうか、と思つたら悲しくなつた。

しかし、お姉さんは気に入らなかつたわけではなく、遠慮していたみたいだ。

家には不法侵入までしたのに……。

俺は内心首を傾げながらも、問題はないと説明する。

お姉さんも納得したのか、堂々とした態度で部屋に入つていった。

その後は別行動をとつた。

お姉さんもじっくり見たいだろうし、俺もやりたいことがあったか

ら。

俺は、ワンピース系の服がかかっているコーナーに行き、一着一着じっくり見ていった。

何時間たったのか、俺はこれだと思う服を見つけ、期待と緊張でドキドキする胸を押さえながらお姉さんのもとに向かう。

回り道をするのもどうかしくて、服の間に突っ込んでいく。かかっている服の下から細い足が見えると、俺は抱えている服を後ろ手にもちかえて、トンネルの外に出る。

面を外しているお姉さんが、俺を見て微笑んだ。

それにどぎまぎしながら、もごもごと口を開く。

「お姉さん。服は決まりましたか？」

「候補はつくった。」

良かった、まだ決めてないみたい。

俺は背中で隠している服を、お姉さんのほうに差し出した。

「あ、の。これ、お姉さんに似合うと思って……。」

それは、清楚な感じのワンピース。

俺を気に入ったと言ってくれたお姉さんに、感謝の気持ちを伝えたくて選んだものだ。

だから、

「選んでくれたのか？ありがとう。」
その言葉がもの凄く嬉しかった。

お姉さんは、白くて長い指を自分に這わせ、なにかに気づいたかのように、その状態のままとまる。

藍色の瞳が俺に向き、伸ばした人差し指が俺の後方をさす。

「少年。私もこれに着替えるから、この中から好みにあうものを選んで、着替える。」

お姉さんはそれだけ言っと、俺に背をむけた。

照れているみたいで可愛いと思ったが、それどころではない。

てつきり、お姉さん自身の服を選んでいるんだと思ってたのに。喜びで、胸がいつぱいだ。

俺は天にも上る気持ちで、お姉さんが選んだ服を見る。

候補は全部で3つだが、どれもこれも芸術的だった。

だから、迷いに迷って、結局、濃いめの紫を基調とした着物にした。これは本格的な着物ではないようで、着替えるのは簡単だった。

お姉さんはもう終わっているみたいなので、

「着替え終わりました。」

と俺から声をかけた。

「こちらもだ」

短く返される。

でも嫌な気分にはならない。

このほうがお姉さんらしくていい。

俺は早くお姉さんに見てもらいたくて、またそれと同じくらいお姉

さんを見たくて、口早に言う。

「あ、ではいっせいのーせ」

ぱつと振り返ると、ゆっくりと体を反転させるお姉さんが目にはいつた。

動きにあわせて、ふわりと服の裾と、長い髪が舞う。
時がとまったかのようにだ。

「よく似合う。」

お姉さんの言葉が合図として、時が再び流れ出す。

「お姉さんも、すごく綺麗です。」

何かを考える前に、この言葉がでた。

綺麗。

今までの汚い人間とは大違い。

お姉さんは俺のセリフを聞いて、物言いたげに目を細める。

鋭くなった眼差しに、肩がびくりとはねあがる。

何か気にさわるようなことを言ったかな？

先ほどまでとは違う理由で鼓動が早くなる。

俺が見ている前で、お姉さんはゆっくりと口を開き、

「少年。今さらだが、名は何という？」

そんなことを言った。

一瞬呆気にとられる。

しかし、その内容が頭に入ってくると、安堵と困惑が同時におしよせてきた。

「ごめんなさい。俺、もう長い間名前を呼ばれていないから、自分の名前が……」

俺には名がない。

名を呼ばれるほど親しい人がいなかったから。

でも今、俺はお姉さんに名を告げられないことを悲しく思う。

お姉さんはそんな俺の内心を読み取ったのか、優しい声で聞いてきた。

「では、私が名付けても？」

衝撃が体にはしる。

名前。お姉さんがくれる……。

ぐっと何かがせりあがってくる。

「紫音。それでどうだ？」

綺麗な響き。

お姉さんの口からでるそれは、甘いうずきを持って、心に染み入った。

「紫音。俺の名前。」

自分自身でも呟いてみる。

居場所を与えられたかのような安心感。

目を閉じて、身をゆだねてしまいたいが、俺もお姉さんに聞かなくてはならない。

「お、姉さんは？お姉さんの名前は？」

俺の問いに、聖母のような慈愛の微笑みでお姉さんは囁いた。

「てふ。私の名はてふだ。」

17話 撫で撫で。（前書き）

てふ視点です。

紫音が可愛くかけるかなあ。

17話 撫で撫で。

複雑な気分だ。

腕のなかの紫音が、私を慰めるように、背をさする。

齡何百歳の私が、だ。

ヨボヨボのお婆さんが、年端もいかない子供にすぎる図が頭に浮かぶ。

シユール。

非常に芸術的でない。

しかし、そんな内心とは裏腹に、体は弛緩し、

紫音にもたれかかるような体勢になってしまう。

上から下、また上から下。

あまりにも心地よくて、やめろだなんて言えない。

会ったばかりなのに、何故こんなにも愛しいのか。

その問いの答えは、

運命とか、波長があうとか、そういうものではない。

私が芸術家で、紫音が私の作品だからだ。

整った顔、美しい声、その私を案じる心……。

どれかひとつでも欠けていたら、私はこの手を振り払っていたことだろう。

ふむ。私はやはりどこか狂っているのかもしれないな。

紫音に対する愛情の根元にあるのは、家族愛でも、恋情でもなく、芸術作品への執着だ。

そして、それに満足している自分もいる。

私は芸術家。

なら、この最高の素材を手放すわけにはいかない。

「紫音。よく聞け。

お前に話さなければならぬことがある。」

抱き合ったままなので、表情を確認することはできないが、私の言葉と共に止まった手の動きが、紫音の緊張を十分に物語っていた。

そして、それを引き金に、私自身驚くほど流暢に口が動き出す。

私が仙人であること。

弟子探しのために、桜ヶ峰をでてきたこと。

契約のこと。

弱点と特性のこと。

私が異端であること。

そして、紫音を弟子にしたいと思っていること。

一つ一つを丁寧に説明したせいか、全て言い終わったときには、朝日が上っていた。

窓からさしこむ日差しに、紫音の髪がキラキラと耀く。美しい。

あの焼けつくような夕日の中よりも、やさしく、どこか物悲しい朝の雰囲気のほうが、紫音にはあう。

じっくり見ようと、くっついていてる体をはなす。

アメジストのような瞳が、私の瞳とまじわった。薄紅色の唇が開く。

「2つほど質問したいことがあります。」

紫音の瞳は出会った当初の揺らぎはなかった。

「1つは、弱点と特性のことです。

てふさんのそれは何ですか？」

その瞳は強い光りだけをたたえている。

「私の弱点は《闇》。特性は《芸術》だ。」

私が、契約前から魂にかかえていたもの。

「私は、私が自身の心を見失ったとき、死ぬ。

昔は《狂気》とされていたが、それだと不適切だ。

闇が光りを侵食するように、私でない何かが私を支配すれば、私は、死ぬんだ。

逆に言えば、それ以外のことで死ぬことはない。」

「そして、《芸術》はわかるだろう？
美しいものを愛でることが、私の安らぎだ。」

紫音は何かを考えるように目を瞑っている。
その顔はまるで寝ているかのように穏やかだ。

再び目が開けられる。
瞳の強さにぶれはない。

「もう1つは、」

？不自然に言葉が途切れる。
いいよどんでいるのか、口が薄いては閉じ、閉じては開くを繰り返している。

何度目かの逡巡をし、意を決したように大きく口を開く。

「仙人は、不老不死なんですよね？」
私は紫音が何を言いたいのかわからなかった。
仙人が不老不死であることは、どんな田舎者だって知っているはずだ。

「あの、今契約したら、俺は成長出来なくなりますか？
ず、ずっと子供のままは、嫌なので、もしそうなら、契約は先伸ば

しに・・・・・・・・。」

啞然。

「ぶくはっ・・・・・・・・くくっ・・・・・・・・くくくくっ・・・・・・・・。」
笑ってはいけない。

しかし、噛み殺せなかった笑い声が口からもれてしまった。

「うくく・・・・・・・・ふっ、くくくっ・・・・・・・・随分可愛らしい。」

「な！？俺は真剣なのに酷いです！」

どうやら、本音が口をついてしまったようだ。

ああでも本当に可愛い。

「心配するな。仙人は自身の最盛期時の姿で時がとまる。
お前もそれなりに成長するだろうさ。・・・・・・・・くくっ。」

紫音は怒り心頭な様子だ。

頬を紅潮させて睨んでも、逆効果にしかないが。

「ふふふっ・・・・・・・・。それで、紫音は私の弟子になってくれるのか
な？」

あ、ふくらんだ。
視線も脇へそらされる。

「俺を、弟子にしてくださいっ！」

最高の、芸術だな？
紫音。

「くくくつ。男に二言はないな？
さっそく始めるとしよう。」

そらされた視線が私のもとへ。

「腕をまつすぐにつきだせ。
身体中が熱くなるだろうが、おろすなよ。」

伸ばされた腕の手のひらを両手で包み込む。

「祝福／鐘の音／空の羽ばたき／金の糸／夢現／開かれる扉／永久
の道／続く果て／悲鳴をあげる宝箱／言紬／風の花」

これは師匠から弟子へのプレゼント。
贈り物の内容で仙人の底がしれると言われる。
あるものは炎で出来た宝石を

またあるものは弟子の額に刺青を
そして私は・・・・・・・・

「連奏。」

芸術家は芸術家らしく、ただ一時の感動を。

蒼く濡れた空

荘厳な鐘の音が辺りに響き

雲を通して太陽の光りが降り注ぐ。

鮮やかな緑は果てまで続き

遠くの景色を風が運ぶ。

紫音はその光景に目を見開き、そこから涙を溢れさせる。
悲鳴をあげる宝箱はお前だよ。

最後のしあげだ。

「桜ヶ峰の仙人、てふは、紫音を我が弟子と認める。」

「紫音。くくつ、ありがたくいただくぞ。」

涙で濡れた顔が困惑に染まる。

私は自身の唇をぐつと噛んで、血を滲ませると、

両手で掴んでいる紫音の手を引っ張り、

淡い色の唇に

そつと、

己のものを重ねた。

「ごちそうさま。」

――契約完了

「な、何を……」

紫音の言葉は最後まで続かない。

体内に入った私の血が効果を發揮しているのだろう。

紫音は眉をよせて苦しみだした。

「はう、あつ……あつ、い。」

息が途切れがちになる。

しかし、言いつけ通り、腕は伸ばしたままだ。

足も何とか踏ん張っている。

「はあ、はあ、はあ、はあ……。」

終わったようだな。

日はもう天を指している。

時間にしておよそ五時間。

大の大人でも30分耐えられない者もいる苦痛に、紫音は耐えてみせた。

私は腕を伸ばしたまま、座りこんでいる紫音を抱き締める。

汗だくなその体は、本来ありえないほど熱い。

「よく、頑張ったな。」

紫音がそうしてくれたように、その背を撫でる。

「これでお前も仙人だ。」

私の腕の中で、小さく頷く気配がした。

17話 撫で撫で。(後書き)

何だかんだでここまでできてしまいました。

でも、まだまだ続きます。

18話 のんびりしますか（前書き）

てふ視点です。

18話 のんびりしますか

ふに。

ふにふに。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ふよふよふよふよ。

ふいん。

「ひゃひひへるんひえふは！」

「随分反抗的な目だな、紫音。
罰として……」

たてたてよこよこまゝるかいて、よつと。」

伸びる伸びる。

あ、涙目。

「酷いです。何でこんなことするんですか!？」

紫音は私に摘ままれて赤くなった頬を両手でおさえている。
悩殺ポーズだ。

無意識なのがまた恐ろしい。

「てふさん聞いてますか！」

やれやれ、さらに機嫌を悪くしてしまったようだ。

紫音が怒っても可愛いだけなんだが……。

これ以上意地悪して、拗ねられるのも面倒だ。

謝罪はしたくないから、話題を変えねばな。

「おはよう、紫音。

2日間も寝通しだったわりには元気だな。」

そう2日だ。

契約が終わったあの日、

気絶するように眠りについた紫音を寝台まで運んでから、それだけの時がたっている。

体の変化は終了し、仙人化しているから、食事の心配はないが。流石に寝過ぎではないかと思う。

紫音自身もそう思ったのか、ひどく驚いた顔をしている。

「そ、そんなにたっているんですか？」

狼狽した声。

私は返事をするのも億劫で、鼻を鳴らすにとどまる。

不穏な空気を敏感に感じ取ったのか、紫音は怯えるように目を見開いた。

「まったく」

そんな顔をされたら、文句も何も言えなくなるじゃないか。内心たらたらと不満を垂れ流す。

だが、いつまでもこれでは大人げない。

私は未だ頬にあてられている両手をどかすと、私自身の手で紫音の頬を包む。

そのまま、滑らかでいて、もっちりとした感触を楽しむ。

紫音も気持ち良いのか、目を細めてうつとりしている。

可愛い。

ふむ。あの眠り姫状態も美しくはあったが、やはりこうでなくてはな。

「心配した。」

思いの外、すんなりとこの言葉がでた。

誰かを案じる言葉なんて使うことないだろうと思っていたのに、いつになく素直な私に、紫音は眉尻をさげて謝った。

「ごめんなさい。」

「本当に……。」

これで起きなければキスしなければならなかったしな。」

眠るお姫様に、王子がキスをすると魔法がとける。

有名な話だろう？

「っ／／／／／／／／／／」

真っ赤になってまあ。

こういう顔見ると、悪戯心が疼く。

私は右手で紫音の顎を掴み、左手で腰を抱き寄せる。

「林檎みたいだな。」

くくっ……食べて欲しいのか？」

凄い。耳まで赤いな。

「可愛い。」

唇を耳元によせてそう囁くと、面白いくらいに体を震わせる。紫音は抵抗を諦めたのか、ぐったりと体の力をぬいた。

「意地悪です。」
と呟いて。

19話 どうぞ！（前書き）

紫音視点です。

見ました？

お気に入り登録10越しました！
皆さん感謝です！

19話 どうぞ！

てふさんは、もう2、3日俺の様子を見たら、旅に戻るつもりらしい。

もちろん俺もついていく。

何せ俺はてふさんの一番弟子だ。

俺は今、自分をてふさんの弟子と呼べることに喜びを見いだしている。

てふさんは意地悪だけれど、時々ふと見せる表情はとても可愛らしくて綺麗。

師匠だけれど、俺が守らなければならないと思う。

俺は幸いにも掃除が得意だし。

まさか人殺しスキルがこんなところで役立つとは思わなかったけど・
・・・。

眩しい。

目に突き刺さるような光で目を覚ます。

太陽のあの高さだと、もう12時を上回っていることだろう。

契約をしてからというもの、こういうことが続く。

てふさんの話だと、寿命が永遠に延ばされたことに、体がついていけていない、ということらしい。

今まで感じていた時間の流れが、急に遅くなったので、体が勘違いしている状態とも言っていた。

寝起きのぼんやりした頭で考えにふけっていると、この部屋に向かってくる気配を感じた。

てふさんだ。

牢での暗闇の生活は、俺の感覚を鋭くしてくれている。

気配を見分けるくらいは朝飯前だ。

俺は腹筋に力を入れて起き上がり、枕元に畳んである服に着替え始める。

こんこんとノックがされる頃には、ベッドメイキングも終わっていた。

「起きていたか、紫音。」

俺が贈ったワンピースを着たてふさんが、部屋の中に入ってくる。気に入ってくれているようで嬉しい。

「はい。おはようございます。」

心なしか、声も弾んでいるような気がする。

その時、てふさんの腰に例の仮面がさげられているのが見えた。

淡い色をしている出で立ちに、毒々しいほど赤い鬼の面は異様に目立っていた。

しかし、おかしい感じはなく、逆に全体が引き締まっていて、何もないより洗練している。

惚れ惚れするようなセンスだ。

1人そう結論づけている俺にの耳に、てふさんの綺麗な声が飛び込んでくる。

「調子が良いようなら、今日はでかけようと思うんだが。」

どうだ？と藍色の瞳が語る。

俺は腕を回したり、屈伸したりして、体に異常がないか確かめる。

是が非でもでも行きたいが、途中で倒れたりして、迷惑をかけるのは嫌だ。

いろいろな動作をすると、ポキポキ骨が鳴る音がしたが、概ね良好。

「大丈夫です。」

と、てふさんを見上げながら宣言する。

「どこへ行くつもりですか？」

案内できればいいのだけど……。

てふさんは俺の問いに一拍おいて答える。

「旅の準備をしに。」

俺の顔は輝いていたことだろう。

俺はてふさんの前を歩いて、先導する。

目的地は町の外れにある道具やだ。

他にもいくつか候補はあったけども、そこが最も品揃えが良く、何より、裏通りにあるのがいい。

裏通りは、表通りより幾分清潔で、あまり臭くもない。

綺麗な人には綺麗なところにいて欲しいと思う。

寂れた町の中を悠然と歩く姿もカッコいいけれど。

「ここか。」

「はい。」

服のときと全く同じ会話。

違うのは俺とてふさんの関係だけだ。

俺達の目の前には廃屋のような大きな屋敷がある。

屋敷の表面には蔦が蔓延り、窓はひび割れていて、所々血液が付着している。

俺は知らなかったが、一見お化け屋敷のような外見だ。

「では、行きましょう。今回もタダです！」

てふさんは何かを考えるように顎に手をあてると、溜め息をついて首をふった。

「なんとかなるだろう。」

？何のことだろう。

「どうかしたんですか？」

てふさんは俺の言葉に苦笑すると、「何でない。」と一言言い、ゆつくりと屋敷に足を踏み入れた。

俺は疑問を残しながらも、あえて深くは聞かずに、後を追うようにして入っていった。

20話 お化けなんてないさ。(前書き)

てふ視点です。

しくしく。

昨日は確かに10越えてたのに……。
感想、批評待ってます。

20話 お化けなんてないさ。

これは、いじめか？

ウエルネの住宅らしく白い外壁をしているが、逆にそれが恐ろしい。真っ昼間なのに、屋敷の周りだけが切り取られたかのように陰鬱だ。

紫音の笑みにほだされて、なんとかなるだろう、いやなんとかない！と少々投げやりな気分で中に入ったが、早くも後悔しはじめている。

可愛い可愛い弟子に情けない姿は見せたくない。

しかし、一歩踏み出すたびに鳴るギシギシという音に、心臓が壊されそうになる。

こうなったらもうだめだ。

見苦しかろうと、何かアクションをしなければ、腰がぬけるだろう。

見栄をはりつつ何ができるだろうか。

恐怖による混乱状態は、えてして妙な判決をくだす。

私も例外ではないらしく、よく考える前に実行してしまった。歌ってしまったのだ。あの歌を。

お〇けなんてないさ、を

紫音が突然歌いだした私を凝視している。それはそうだろう。

そもそも私は音痴だ。

歌自体は好きなんだが、うまくいかん。つまり私は、ぴょんぴょん音が外れて、奇怪になったこれを紫音に聞かれてしまったのだ！

幸いなことに歌詞は古代語だ。

内容がさとられることはないだろう。

どちらにせよ、面目丸潰れだが。

「とても綺麗な歌ですね。歌詞はどういう意味ですか？」

ああ、こんな子供にまで気をつかわせるとは。

恐怖だけでなく羞恥でも体が震えてくる。

ふむ。ここまでできてしまったのだから腹を括ろつ。

今さら見栄はつたてしようがない。

正直にお化けが怖いと……

無理だな。婉曲的に言うでしょう。

「昔、魔除けの歌として歌われていたものだ。」

嘘ではない。

本当のことだ。

魔除けの歌として、の後に子供が、をいれなかったただけだ。必死にいい繕う私に、紫音は頼もしい言葉を返してくれる。

「あ、わかりました。

大丈夫です。

俺が何とかしますね！」

終わった。

紫音はどうやら私の気持ちを敏感に感じとったようだ。

恥ずかしすぎる。

いい年してお化けが怖いなんて……………。

ぎし、ギイ、ギギギギ

どこからともなく音が鳴る。

次の瞬間……………。

ドサッ。

上から黒い物体が落ちてきた。

「うわっ」

紫音の驚く声が遠くのほうから聞こえる。

私は微動だにできなかった。

黒い、

長くて、

白い、

幽鬼のような、

腕が捻れて曲がり、

っ！！

でた————！！！！

でた、いたんだ本当にやつらは！

伝承の中だけの存在ではなかったのだ!!!
歴史に騙された。

お化けは実在するではないか！

「紫音。」

多くの感情を含みすぎて、無機質になった声で紫音を呼ぶ。
それ以上は喉が麻痺して言葉にできなかった。

氷ついている体を無理に動かして、もと来た道に戻ろうとする。
何とか体を反転させると、真剣な顔をした紫音と目があつた。

おお、私が言いたいことが伝わっ

「はい。」

てふさん、この先を真っ直ぐいって、突き当たりを左、手前から数
えて4つめが目的地です。

先に行つて待つていてください。

俺は掃除をしに行きます。」

てなかつたあああああ!!!

私は逃げようと言いたかつたんだ。

ん？掃除？

お化け退治に行くというのか。

それは助かるが、

「1人で大丈夫か？」

否と言え。

この場に1人は怖すぎる！
しかし私の祈りは届かない。

「慣れています。」

紫音はふわつと優しく微笑むと、走って階上が上がっていった。
私は追いかけるなんてことが出来るわけもなくその場へたりこむ。

紫音。

早く戻ってこい。

21話 お掃除開始（前書き）

紫音視点です。

21話 お掃除開始

俺はてふさんの後ろについて歩いている。

白い髪が、サラリサラリと揺れ動く様は、鳥が羽ばたくのに似ていて、薄暗い室内にいてなお、大空を連想させた。

綺麗。

てふさんの特性は《芸術》だというのが、俺はてふさんそのものが芸術だと思う。

……そういえば、俺の弱点と特性はどうなるんだろう。

師匠から弟子に受け継がれる過程で、若干違うものになるというけれど。

ふと、てふさんが、このことを伝言ゲームと称したことを思い出した。

視線をやや上げて、てふさんを仰ぎ見る。

あれ？

眉尻が少し下がっている？

途方にくれているようにも、困っているようにも受け取れる表情だ。可愛い。

いつも綺麗なてふさんがこういう可愛らしい顔を見ると、思わず抱き締めて、ぎゅうつとしたくなる。

俺がそんなことを考えながらじっとてふさんを伺っていると、てふ

さんは突然歌いだした。

いきなりだったのでかなり驚いたが、楽器をつま弾くかのような、優美な歌に俺は引き込まれる。

残念なことに、歌は短く、歌詞もわからなかった。また歌って欲しい。

しかし、恥じらうように頬を染めたてふさんにそう言うことはできなかった。歌詞の内容を聞くにとどめた。

何でも、魔除けの歌として、昔歌われていたらし。

？でも何故、今それを歌うんだろう？

てふさんが意味のないことをするはずがないから、何か意味があるんだろうけど……。

その時、階上から、微かに息づかいが聞こえた。

多分6人。

そうかてふさんは、このことを俺に伝えようと思ったんだな。

流石！

気配の探知に自信をもっている俺でも気づかなかったのに。

巧みな会話も素晴らしいです！

俺がそうなように、芸術家であるてふさんも、汚いものが嫌いだ。

もしその6人が“汚い”なら、折角のお出掛けが台無しになる。

てふさんはその事を懸念しているみたい。

「あ、わかりました。

大丈夫です。

（もしその時は）俺が何とかします。」

俺がそういうと、てふさんは安心したのか、無表情に戻った。

ギイ……

上の階へ上がる階段を通りすぎた辺りで、不吉な音がした。

ぎし、ギイ、ギギギギ……

例のやつらの仕業だろう。

何をしてい、

ドサッ

天井を突き破って何かが落ちてきた。

俺の口から情けない悲鳴が漏れる。

それは、全身血濡れの女の人らしき死体だった。

乱れた黒く長い髪

血の気の失せた白い顔

唇はひび割れて

腕は肘辺りから折れている。

汚い。

てふさんもそう思ったのだろう。

悲鳴もあげることもなく、動揺もせず、それを見下ろしていたが、
ゆっくりと俺のほうを向いた顔は不快そうに歪められていた。

「紫音。」

その一言で理解できた。

俺は了承の返事と、目的地がどこにあるかを告げる。

てふさんは、それでも心配なのか「一人で大丈夫か？」と聞いてきた。

こそばゆい。

心配されるのは嬉しいことだ。

けれど、だからこそ、こんな喜びをくれるてふさんの手をわずらわせたくない。

それに掃除は俺の専門分野だ。

「慣れてます。」

俺は笑ってそういい、6人の掃除に向かった。

たたと、二段飛ばしで階段をかけ上る。

ものの数秒で二階までくると、なるべく目立たないように、壁に隠れながら、廊下を覗き見る。

予想に違わず、そこには6人の男がいた。

何やら言い争っているようだ。

「ちつ、おいどうすんだよ。」

「間違いなく見られたぞ。」

「やべえ。」

「大丈夫だ。さっきの声からすると、相手は女だ。悲鳴を」

「大丈夫なんかじゃねえよ。」

「そうだ。ここは猟奇殺人鬼の町とも言われるんだぞ！

もしかしたら、死体なんて見慣れているかもしれないだろ？」

「くそつ。こうなつたらや殺るしかねえぞ。」
「ああ、そうだ。殺すしか。」

殺す？

てふさんを？

こんな汚いやつらが？

あんなに綺麗な人を？

その6人はまだ、いろいろ言っていたが、俺の耳は役割を放棄したように、何も聞こえない。

頭の奥、いや、そのさらに先にある何かが、キリキリと音をたてる。細い糸がぐつと伸びていく感覚。

「ついでに、その女犯してしまおうぜ。」

ぷつん。

俺の中で何かが決壊した。

てふさんの言葉がフラッシュバックする。

「仙術はイメージだ。」

そうだな、本来イメージとは曖昧なものだ。

鮮明に考えようとすればするほど、細部が綻びる。

それでは仙術は発動できない。

だから――。」

イメージを言葉で明確にする。

「うわっと、何だあ？この餓鬼。」

目の前に、汚い者が……

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

こんな物はいらない。

そう思ったら、勝手に口が動いた。

「破裂／刃／踊る赤／無音の闇／絡みつく」

「おい……。」

汚い物が俺に手を伸ばす。

てふさんが選んでくれた、この服に。

かちりと、どこかで何かが噛み合う音が聞こえた。

「消えろ。」

窓が割れる。

砕けるような感じでなく、意思をもった生き物かのように、音もなく。

それは、パラパラと余計な部分を自ら削り、先の尖った凶器へと変貌をとげる。

スウー――

「ひい！何だ、これ。」

なんだこれはあああああ！！」

次の瞬間、それらは串刺しになっていた・・・・・・。

罪悪感、やはりない。

いらぬ“物”を壊したただけだ。

弱点と特性はまだわからないけれど、

俺の仙術、魂の本質は何となくわかった。

《破壊》

知らない“物”を壊すこと。

上ったときとは違って変わって、思考に耽りながら、時間をかけて降りる。

てふさんは怖がるだろうか？

残り三段。

俺に笑いかけてくれたあの顔で、俺を詰るだろうか。

残り二段。

俺を弟子になんかしなければ良かったと、後悔するだろうか。

残り一段。

そんてふさんは、綺麗じゃ、ない。

ゼロ。

沈んだ気持ちで、角を曲がる。
そこには、

壁に凭れて座っているてふさんがいた。

「遅かったな。」

その顔にうつすら笑みが浮かぶ。
待っていてくれたんだろうか。

「俺、仙術が使えました。」

気づいたら、そう言っていた。

俺の声は少し震えているかもしれない。

もし、てふさんに拒否されたら俺は――

「知ってる。」

《破壊》だろう?」

！何故――?

困惑が顔に出ていたのだろう。

俺が何か言う前に、てふさんは言葉を繋いだ。

「師匠は、弟子のことを何でも知っているものなんだ。」
答えになってない。
けれど、やっぱり

てふさんは綺麗だなあ。

22話 いっぞやの門番の話（前書き）

題名のまんまですね。

私はこの人結構気に入っています。

22話 いっそやの門番の話

小春日和つてかあ？
いい気分だ。

ある日の早朝、とある町のとある門番さんは、ぐっ तरीというオノマトペがびったり当てはまる格好で、ただずんでいた。
言わずもがな、親切で、職務放棄も甚だしい、あのお方である。

ふあうあ・・・・・・

妙な欠伸をして、ぼんやりと空を眺める。
いつもなら、雄大な空を眺めると、清々しい気分になるのだが、その日は色が悪かった。
濃い青、まるで誰かさんを彷彿させるような色だ。

結局あれは何だったのかねえ。

そう思うと、欠伸ではなくため息がでた。

頭の中には鬼の面がくるくる、くるくる回っている。

あれから一週間たつが、その程度の時では消せないほど、あの少女の印象は強烈だ。

最初の二日は、夢の中にまで出てきて随分魘された。

三日目からは極力意識から追いやって、俺は何も見えていない知らない見てない知らない、とくり返した。

・・・・・・

では何故俺は今日に限って、やつのことを思い出しているんだ？
嫌な予感がする。

脳内で、回る仮面と一緒にあって、暫く厄介になるという言葉がリ
ピートされる。

で、暫くつてどれくら

「おい。」

幻聴だろうか、背後から澄んだアルトの声が聞こえるんだが。
目の前が真っ暗になる。

まさか、な。

しかし一週間というのは、調度暫くに相対するんじゃないだろうか。

恐いもの見たさって、あるよな。

至急この場から逃げろ、と俺自慢の危険探知君が大一級警報を鳴ら
しているが、俺は振り返らずにはいらなかった。

機械のようにぎこちない動作で体を反転する。

見えたのは、鬼の面。

あの時と同じ服装をしている。

ただ、白い髪がゆったりと三つ編みされ、右肩から垂れ下がってい
る。

殺気も怒気もないが、組まれた腕が不満を表しているように見える。
そのせいで、大きめの膨らみがさらに強調されていたことを追記し
ておく。

そして、ついつと視線が下に動く。

濃い紫の和服、小さな頭は見事な金だ。

身長は167cmの少女に対し149cmくらい。

ん？何故そんなに正確なのかって？

んなもん、経験だ。経験。
が、問題はそれではない。
その小僧の顔には例によって例のごとく、仮面がつけられている。
顔上半分を隠す狐の面が。

信者！？

入ったときにはいなかった存在に盛大に顔がひきつった。
その少年もまた、ただ者ならぬ空気を発している。

たった7日で一体何が……。

啞然としている俺に話しかけたのは少女ではなく小僧のほうだった。

「おはようございます。

町を出たいのですが……………」

丁寧な言葉使いだ。

こいつは意外と常識人かもしれない。

ある意味戦場よりも神経をつかうこの空間に光明がさした気がした。

「じろじろと見つめるな、変態め。」

ああ、光明がさした気がしたただだった。

超低音ボイスと特大の殺気が俺のハートをつきさす。

少女の方は間違いなくそれに気づいているはずなのに、どこ吹く風だ。

最悪だ。この鬼と狐のコンビ。
心底そう思ったが、口には出さない。
そんなことしたら鬼は笑って（笑うといっても嘲笑だろう）、狐は
噛みついてくるだろう。

微動だにしない俺を今度は鬼がつつきだした。

「ついでに通行証も作れ。」

――以下不運な門番の脳内会議――

リーダー「おい、どうするよ。」

常識人「通行証の偽造は違反だぜ？」

リーダー「でもよ、やらなかったら……」

冷静君「死ぬな。」

常識人「作ったら作ったで上の人が、」

冷静君「首にするだろう。」

リーダー「詰んでね？」

悪魔「命のが大事だろうよ。」

保身君「言わなければいけないって。」

リーダー「では多数決をとる。」

結果は圧倒的に……

〔脳内会議終了〕

「わかった。ついて来い。」

うはは、俺はやっぱり自分が可愛い。

極悪仮面達なんか殺されてたまるか。

門のところから二分歩いて俺の家に案内する。

仕事場が近いからって、門番になんかなるんじゃないかった。
安月給だし。

文句をたらたら流しながら、ポケットの中の鍵を取りだし、さしこむ。

扉を開けたら、俺の聖域だ。

ごちゃごちゃしていて大変居心地がいい。

ガチャツ……

むわん、と汗とカビの臭いが漂う。

床には汚れた皿やら、脱いだ服がところせましと陣取り合戦をしている。

黒い物体がカサササと蠢い「閉めろ。」

強い殺気に驚いて振り返ると、仮面をつけててもわかるほど、鬼と狐は顔をしかめていた。

どつと冷や汗がでる。

「聞こえなかったか。閉めろと言ったんだ。」

聞こえてますよ。

嫌なくらいにはつきりと。

「わ、わかった。

しかし必要な書類は中だ。取ったら出てくるから、ちょっと待っててくれ。」

ああ、そのまま閉じこもりたい。

狐怖いし。

その後のことは、聞かないでほしい。

俺は何も見えていない知らない見えない知らない知らない知らない知らない。

23話 愛の逃避行といこうじゃないか。(前書き)

てふ視点です。

説明っぽくなってしまいました。

説明ですけど。

23話 愛の逃避行といこうじゃないか。

紫音の仙術が《破壊》なのは予想外だった。
良い意味でも、悪い意味でもだ。

仙人には細かなルール、いやいつそ法律といってもいいような決まりごと——禁忌がいくつもある。

守らないものには、死刑か終身刑のどちらかが課せられる。

もちろん、選ぶ権利は当事者がない。

殺せるならば殺せ、無理ならば幽閉しろ、つまりはそういうことだ。

何故こんなものがあるのか。理由は頭が痛くなるほど多いが、ぱっと思いつくものを例として1つ挙げておこう。

それは、三大仙人が提唱する、LOVE & amp・PEACE
のためだ。

基本不老不死であり、仙術という巨大な力を持つ仙人が暴れたら、この世は地獄となりかねない。

禁忌は仙人の行き過ぎた行動を制限する役目をもつのだ。

さて、ではその内容だが、代表的な禁忌としては、今私が現在進行形で行っている下山があげられる。

下山の禁止は、領土争いを避けるためのものだ。

仙人は己の特性を満たす場所に腰を落着ける。しかし、気に入った箇所をいくつも占有されたら、土地はなくなっていくてしまう。

下山を禁ずるより、争うことを禁じた方が手っ取り早いと思うかも

しない。

だが、特性とは執着だ。

そして、仙人の執着は規則ごとくで制することができるような、簡単なものではない。

私も本来なら罰の対象になるが、私は極めて稀な存在であるし、私の特性《芸術》は閉じ籠っていては満たされないものだ。このように、禁忌を侵しても、見逃されるケースはある。《放浪》という弱点をもつ仙人などは、もう何百年と旅をしまわっているだろう。

ここからが本題だが、弟子をとる際にもいろいろとある。

希望者に試練を与えることもそうだが、弟子の仙術がどのようなものかを把握するのも、それにあたる。

前者は仙人を増やさないための処置だ。

後者は、禍を事前に防ぐ意図を持っている。

何度も言ったと思うが仙術は魂に影響される。

随分前の話しになるが、《魔王》というものがあつた。

そいつは、生あるものを滅ぼさんとするかのごとく、全てを壊しつつくし、三大仙人の1人――認めたくはないが、私の師匠――《勇者》に討伐された。

他にも、《快樂殺人鬼》、《魔物》、《墓》など、長い歴史の分だけ禍はいた。

契約をかわすと、弟子の体内に入った血のおかげで、弟子が最初に仙術を使ったとき、その内容がわかるようになってい

そして、もしそれが禍なら師匠として始末しなければならない。

紫音の《破壊》は、ギリギリ禍ではない、と思う。

なぜなら、無差別に殺しまくる類いのものではないからだ。

あくまでも、本人に不都合なものを壊すことが《破壊》の本質である。

禍なみの威力はあるだろうが。

心配なのは、不都合なものに世界が含まれるようになった場合だろう。

そうなったら実力だけは確かな変人仙人が、紫音を討伐しにくる。

多分その前に、三大仙人《情報狂》が様子見にやってくるだろうが・
・・・・

私は紫音を“壊され”たくない。

あれは私の作品だ。

相手が誰にせよ、三十六計逃げるにしかず、全力で逃げきってみせるとも。

残念ながら、私の《虚栄》ではやつらを追い払うことはできない。

《破壊》（しおん）がいるからといって、まだ仙術の行使経験が少ないことを考慮すると、安心はできない。

まあ、つまりは、これからどこぞの仙人と駆け引きが予想されると
いうことだ。
負けるきはないがな。

24話 この小娘が！

「助かった。」

「本当に、通行証ありがとうございます。」

目の前には、私達のために熱をあげて努力してくれた門番がいる。燃え尽きたように、ピクリとも動かない。疲れて眠っているのだろう。

正直、あの部屋（と呼ぶのもおこがましいほど汚れきった空間）を見たときは、思わず、殺意が芽生えてしまったが、この門番は親切で良いやつだ。

殺さなくてよかった。

生活観はともかく、そういう面では友人になれそうだが、何か困ったことがあったら、手をかしてやってもいい。

私は視線を門番から紫音にうつす。

「感謝を直接伝えられないのは残念だが、もう出発しよう。」

ご機嫌な私に対し、紫音は終始不機嫌そうだったが、私の言葉にぱつと顔を輝かせていた。

怪しげな雰囲気のある狐の面でも、それは隠しきれない。

「はい！」

雷都に行くんですね？楽しみです。」

どこへ行くか、昨日話しあったことだ。

あのお化け屋敷にはなんとガイドブックや地図まで置いてあり、そ

れを見ながら決めた。

私は紫音に頷いてみせ、二人並んで橋をわたった。
広がる湖、その先の平原を見て、妙に感慨深い気持ちになる。
来るときにはまさか、こんなことになるとは思わなかった。
地平線の彼方に見える鬱蒼とした森も何だか愛しく思えてくるから
不思議だ。

「どうかしましたか？」

紫音がふいに話しかけてくる。

気づかなかったが、どうやら私は笑っていたようだ。
私は感慨に耽っていた、とありのままに伝えようと思ったが、それ
ではつまらない。

微笑をそのままに、紫音をからかうことにする。

「紫音。お前と旅が出来て私は嬉しい。」

とたんに、紫音の顔が赤くなる。

一瞬背後に、揺れまくる犬の尻尾が見えたが、気のせいではないだ
ろう。

喜びと照れが素直に出ていて、なんとも可愛らしい。
思わず、吹き出してしまいそうなのを必死でたえる。

「どうした？顔が赤い。」

自分で言っていて、馬鹿らしくなるような問だ。

しかし、不思議そうに聞いてやれば、演技くささもぬける。
だてに何百年も見栄をはり続けているわけじゃない。
私には変人仙人さえ出し抜いた演技力が備わっている。

恥ずかしがっているのか、下を向いてしまった紫音の手をとり、右手で狐の面を外す。

さらに私は、それを左脇に挟んで、自らの面も外して腰へ装着させ、再びフリーになった右手で紫音の頬を包んで持ち上げた。

仕上げるに、

目もとが鮮やかに紅に染められていい感じだ、と心中で呟きながら私の額と紫音の額をつきあわせる。

紫の瞳が視界いっぱいに広がった。

「熱はないようだな。」

私はまるで他意はなかったとでもいうように、すっと離れる。紫音は口を半開きに硬直していた。

くくくつ、可愛い。

しかし、それで終わるのはもったいない。

私は柔らかな金の髪をすくように触る。

「心配かけるな。」

ついでに呆れ半分の微笑を浮かべる。

それを見た紫音は、へにゃんと蕩けるような顔で私を見つめ返してきた。

うつつう。

八の字の眉が、さらに紫音の魅力をひきたてる。
時々思うんだが、私は本当にいい仕事をするな。

そんな感じで昼はまったりと過ごし、夜にはそれはそれは楽しい添い寝をして眠った。

楽しい。全く退屈しない。

それに、ふむ、一応舗装されてはいるが、道なき道、といった方が正しいような森の街道を歩く紫音は、正に妖精だった。

背中に透明に透けた羽が見えたぞ。

毎日24時間（睡眠時もだ。寝顔がまたいい。）私の芸術を愛でることができ、非常に満足だった。

ああ、だった、なのだ。

私達はウエルネから12日ほど歩いた先にあつた、甘味所兼宿屋でとまっている。

木で作られた頑丈そうな宿に、達筆な字で「甘 & a m p ; 宿」と書かれた暖簾が不釣り合いだ。

一階は甘味所として使われ、二階からが部屋となっている。

内装も簡素で、正直あまり長居はしたくないが、紫音が疲れをみせたのだ。

本人は大丈夫、何でもないを繰り返していたが、私は騙されない。宿の三階にある一番いい部屋とやらを借り、半ば無理矢理ベッドに寝かせた。

緑の掛け布団から覗く申し訳なさそうな顔は頬擦りしたくなるほどで、私もこの時までには、わりとご機嫌だったと思う。

しかし、紫音に美味しいものを食べさせてやろうと、一階に降りてきたときから、私の機嫌は坂を転がり落ちるがごとく下降している。

原因は目の前のこいつ。赤毛をくるっくるに巻いた小娘のこの言葉だ。

「わたくしを弟子になさい！」

25話 醜すぎて見るにたえない。(前書き)

てふ視点です。

25話 醜すぎて見るにたえない。

「わたくし、貴女が気に入りましたの。」

わたくしの師匠になれるなんて光栄でしょう?」

何だこのムカつく小娘は。

それが私の第一印象だ。

しつこいほど巻かれた赤い髪は、痛んでいるのかごわごわしている。
瞳は黒でもなく、茶でもなく、ありきたり。

服は吐き気をもよおすほどフリルがついたワンピースだ。

顔はどちらかといえば整っているが、傲慢な表情が、それを台無しにしていた。

萎える。

ここ数日紫音のおかげで溜まっていた何かが、口からでていく気がした。

今すぐ部屋にもどって癒されたい。

だが、私はまだ美味しいものを手に入れるという任務を達成していない。

ふむ、無視だな。

私は毒キノコのような小娘をなかったことにした。

店の調理場辺りから甘い匂いが漂っている。

紫音は甘いものが好きだろうか?

そんなことを考えながら足を進め、店内をみまわる。

珍しいことに和菓子専門店のようだ。

団子、饅頭、羊羹、べっこう飴など、種類は多い。

「~~~~~」

個人的にはみたらし団子が好きなんだが。

「~~~~~!~~~~~!」

あんこもすてがたい。

「~~~~~!~~~~~!??」

.....うるさい。

無視を決め込むことにしたが、無理だ。

私は叫び声の発生源に目をむけることにした。

「お嬢様を無視するとは何様ですか!」

毒キノコに黒蟻がくつついた。多分従者だろう。

黒いスーツに黒い靴、黒い髪に黒い瞳、あげくのはてには浅黒い肌!
こちらにもまた整った顔をしているが、紫音に比べるとな。

「じろじろ見ないでよ。巧^{たくみ}はわたくしのものなのよ!」

じろじろと観察したのが癢に触ったのだろう。

毒キノコに牙をむかれた。いや、そもそもキノコに牙はあったか?

「謝罪を要求します。」

何故だ、そう思ったのが顔にでたのか、蟻は長々と説明しだした。

「まず、お嬢様の願いを聞きいれなかったこと。こんなに愛らしいお嬢様を無下にしたこと。可哀想とは思わないんですか?面の通り鬼ですか、あなたは。それから――」
云々。

耳が役目を放棄したようだ。
この小娘が愛らしい？

馬鹿馬鹿しい。男である紫音にさえ足元にも及ばないのに？
笑えるな。

「何を笑っているのかしら？」

鼻にかかったような声。

不透明でばやけていて最悪。

このままでは耳から体が腐っていくような気がする。

ああ、私は頑張った。

よくたえた。

だからもういいよな？

穏やかな雰囲気の店内に殺気が満ちる。

酷く気分が悪い。

指先が冷たくなっていく。

まるで飢えたかのような感覚。

覚えのあるこれは、怒り。

私は、感情により変わる表情を愛でるのが最も好きだが、精神が崩

壊し、空虚な瞳をした人形も嫌いではない。

芸術でなければ芸術にすればいい。
それだけのことだ。

頭が危険な結論に至ったとき、鈴の音のような美しい声が聞こえた。

「てふさん！」

「紫音。」

怒りが霧散する。

そつだ私は紫音のために美味しいものを……

「紫音。甘いものは好きか？」

私に駆け寄ってきた可愛い弟子を見つめる。急いで起きてきたのだろう。狐の面ははずされている。

その美しい瞳からは困惑が見てとれた。

あれだけの殺気をだした後のこの質問だ。当然だろう。

しかし、深く聞くことをせず、素直に返答してくる。

「甘いものは高級品でしたから、あまり食べたことがないんです。
丁寧な言葉づかいが心に染み入る。」

「そうか。ではまず、私の薦めを食べてほしい。」

大輪の花が咲くような笑顔。

「嬉しいです。」

うむ、これぞ癒し。

26話 何点ですか？（前書き）

紫音視点です。

26話 何点ですか？

また迷惑をかけてしまった。

柔らかなベッドに身を沈めている自分が情けない。

大丈夫と口では言っただけでも、疲れているのは本当だった。

町の外に出たことがない俺は、旅、しかも敬愛する人との旅に興奮がおさまらなかった。

その結果、極度に体力を消耗してしまい、実は立っているのさえ辛かったのだ。

ちろりと、扉のほうを見る。

てふさんは「眠れ。」と一言言っただけ、その扉から出て行ってしまった。

寂しい。

今までは一人でいるほうが好きだったのに。

ここ何週間か、常に一緒にいたせいかわ、俺自身驚くほど、孤独が恐ろしい。

早くてふさん戻ってこないかな。

寝て、起きたら、きっと・・・。

っ！！

殺気、それも研ぎ澄まされた刃のような。

俺はいてもたってもいられなくて、固い体を叱咤し、駆け出した。扉を開け、長い廊下を走り、転がるようにして階段を降りていく。

頭の中にはてふさんのことしかなかった。

ものの数秒で一階についた。

そこには、一組の男女とてふさんが向かい合っている姿。

てふさんは階段に背をむけるように立っていて、表情はうかがえない。

「てふさん！」

どうしたんですか、何があったんですか、そう言いたかったのに、俺の口から出たのは名前だけだった。

白い髪が揺れ、てふさんと目があった。

その瞬間、場を支配していた殺気は消え、俺達が来たときと同じ、ほのぼのとした空気が辺りに満ちる。

「紫音。」

俺はてふさんが呼んだのを合図に駆け寄った。

「紫音。甘いものは好きか？」

突然の質問。

てふさんの意図がわからなかつたけど、正直に答える。

「甘いものは高級品でしたから、あまり食べたことがないんです。」「
ウェルネでは、お菓子なんて売られていなかった。」

数カ月に一度スプーン一杯分の砂糖が手に入れば良い方だ。

「では、まず、私の薦めを食べてほしい。」
ああ、そうか。

てふさんは俺のために食べ物を用意するつもりなんだ。
何故殺気をだすことになったのかは、後で聞いてみよう。
今はただ幸せだから、

「嬉しいです。」

俺のことを考えてくれたことも。

「では、部屋に戻ろうか。」

てふさんの腕には、みたらし団子が入った袋が提げられている。
俺が自分で持とうと思ったけれど、てふさんは許してくれなかった。
俺の疲れなどお見通しらしい。

「ま、待つてください。」

俺達が階段を半ばほど上ったとき、背後から声がかけられた。
反射的に後ろを振り向くと、涙を目にためた女の子と、全身黒で統一した男の人がたっていた。
さっきまで、てふさんと対峙していた二人だ。

てふさんは無視して先に進むので、俺も二人に構わず、足を進める。

「お願い待って！」

金切り声に近い、気分の悪くなるような声。

なんとなく、てふさんが怒っていた理由がわかった。

「待たなかったら、どこまでも追いかけて行ってやるわ！」
なんて汚いんだろう。

俺も殺氣がでそうだったが、てふさんが振り返ったのを見て我慢した。

これらはてふさんの獲物だ。

「とりあえず、部屋まで来てもらおうか。」

「…………部屋に着くや否や、俺は再びベッドに寝かしつけられた。

とはいえ、上半身は起こしているので、部屋の中を見渡せる。
そいつらはドアの近くにただずみ、てふさんは俺のベッドに腰かけている。

気まずい沈黙。

先に声をかけたのはてふさんだった。

「で、何のようだ。」

その声は冷たく、聞くものを凍りつかせるようだ。
部外者である俺でさえも恐ろしい。

それはそいつらも同じようで、滑稽なほど肩を震わせている。

「あ、あの。ですから、わたくしを弟子に…………。」
弟子？

これが、弟子になれるのか。

万が一にもありえないと思う俺は間違っているのだろうか。

俺の芸術性は高くないが、てふさんの趣向は多少わかっていてもりだ。

無理だと思う。そして、俺は嫌だ。

「12点、-92点、低すぎて測定不可。

総合はマイナス、だな。」

ぼつり、とてふさんが呟いた。何のことだろう。

みれば、そいつらも怪訝な顔をしている。

「あ、それ、はいったい・・・。」

黒いのが吃りながら言葉を発した。

困惑が表情にも声にもてんこ盛りにされている。

「お前らは、私が仙人だと言うのはわかってるんだろう？

原因は《細工師》あたりの作品が怪しいな。

まあ、何はともあれ、弟子をとるさいに試練を受けさせるのは知っているな。」

誰も何も言わない。

《細工師》とは誰なのだろう。

「私の試練は、私のこだわりを満たす者しか堪えられないようにしてある。」

ごくり、と喉をならす音が聞こえた。

空気が重い。

しかし、次のてふさんの言葉が、この場の雰囲気を粉碎した。

「それは、見目、声、性格だ。

この三拍子が揃っていなければ、絶対に認めない。

ちなみに、お前は総合マイナス。」

確か、12点、-92点、測定不能。

つまり、見た目12点、声の美醜-92点、性格にいたっては測定できないほど悪いと。

呆然。

一番に現世に帰ってきたのは、女だ。

大きく口を開けて、てふさんに罵声を浴びせる。

「何よそれ！ふざけないで。

私が12点なら、この世には不細工しかないじゃない。

貴女の目は節穴なの！？」

黒いのも抗議を始める。

てふさんはそれに何も答えない。

だが、

「え？」

いつのまにか俺はてふさんに抱き込まれていた。

口がニンマリしている。

「紫音は、私の一番弟子だが、どうだ。

私が見目と声だけで満点をあげたほどだ。性格も逆の意味で測定不

能。

「このレベルでなければ私は応じんぞ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1030v/>

てふてふ物語

2011年9月13日18時31分発行